

韓国農業研究協力プロジェクト
業務報告書
(Vol. 7)

昭和57年(1982年)3月

国際協力事業団
農業開発協力部

農開技

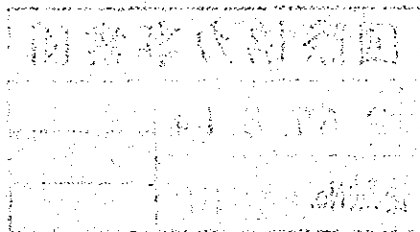
J R

82 - 3

JICA LIBRARY



1048717113



国際協力事業団

受入 月日	'84. 3. 19	110
登録No.	00812	80.7
		ADT

あ い さ つ

本プロジェクトは、昭和49年6月7日から5ヶ年間の協定による研究協力を終了後引き続き昭和54年4月2日に署名された「農業に関する日韓共同計画の実施のための技術協力に関する日本側策定チームと大韓民国政府関係当局との間の討議議事録」に基づき、昭和57年3月31日まで協力実施中のプロジェクトである。

本調査団はR/D協力の最終年度となる56年度の細部運営計画を打合わせると共にこれまでに供与済みの機材の維持管理計画及び研修員執行についての現況に今後の見通しについて韓国側と協議検討を行うことを目的に派遣された。

本報告は上述の調査結果をとりまとめたものであり、今後の本計画運営の為の指針となり、本計画の目標である大韓民国における農業の生産力の向上に寄与することを願うものである。

最後に計画打合せチーム清田安孝団長はじめ団員各位坪井八十二チームリーダーの御協力に謝意を表すとともに、計画打合せにあたり御協力を賜りました外務省及び農林水産省並びに大韓民国の関係各位に対し、厚く御礼を申し上げます。

昭和57年2月

国際協力事業団

農業開発協力部最

村 田 稔 尚

は　じ　め　に

本日韓農業研究プロジェクトは昭和49年6月7日から5カ年間の協定による研究協力に引き続き、昭和54年4月2日に署名された「農業に関する日韓共同研究計画の実施のための技術協力に関する日本側計画策定チームと大韓民国政府関係当局との間の討議議事録」に基づき、昭和57年3月31日まで協力実施中のプロジェクトである。

本プロジェクトは、(1)作物(水稻麦類)の安全多収性品種に関する研究、(2)作物(水稻・麦類)の栄養生理、水分生理および生態に関する研究、(3)土壌肥料に関する総合的研究(特に水田土壌の地力増進)、(4)野菜(施設野菜)の生産増大と品質向上に関する研究、(5)作物保護に関する基礎及び応用研究(特に、稲作病害圃場抵抗性、主要ウイルス類の分類同定、ウンカ類の発生予察)の5研究課題を幅広く取上げており、又、実施機関も、農業技術研究所、作物試験場、麦類研究所、園芸試験場(釜山場)、湖南・嶺南作物試験場等を網羅した総合研究プロジェクトであり、本年度は協力期間の最終年を迎え、8年間を総括する段階にある。

日韓農業研究協力は、これまでに、韓国農業の振興に大きく貢献してきており、研究者、農業者からの評価・期待も大きいといっても過言ではない。

このような、成功をおさめている背景には韓国側のこのプロジェクトに対する真剣な取組みによるところが大きいがこのほか日本からの専門家の派遣が、第一線級の研究者を最も重要な期待に派遣する方式をとったこと、又、研修員についても最大規模の受入れを行ったこと。更に、日韓の気候条件農業事情等が極めて類似しており、日本での研究成果の移転も容易であったことなどがあげられる。

今回、昭和56年4月6日～17日迄、昭和56年度の計画を協議するため、「大韓民国農業研究計画打合せチーム」が派遣された。12日間という短期間であったが、農業部をはじめ農村振興庁、その他プロジェクトに参加している各研究機関を訪問し、各場所における試験研究推進の実態や供与機材の利用状況、研修員の帰国後の活動状況等を把握しつつ、今年度の実施計画の協議を行った。この結果は第3次日韓農業共同研究合同委員会で合議され4月14日日本側代表坪井八十二研究団長と韓国側代表金東秀管理所長の間で合議議事録に署名された。これにより、我々計画打合せチームの任務は所期の目的を達したことになるが、計画にもとづき、共同研究が無事遂行され、プロジェクト最終年にふさわしい成果を上げることを期待したい。

なお、韓国滞在中、農村振興庁長をはじめとする政府・試験場関係各位には、終始親切な対応と多大なる便宜供与をいただいた。また、在ソウル日本大使館および坪井団長を始めとする日本研究団からも格別のご指導ご協力をいただいた。ここに打合せチーム一同、心から感謝の

意を表する次第である。

昭和56(1981)年5月

大韓民国農業研究計画打合せチーム

団長 清 田 安 孝

韓国農業研究協力プロジェクト

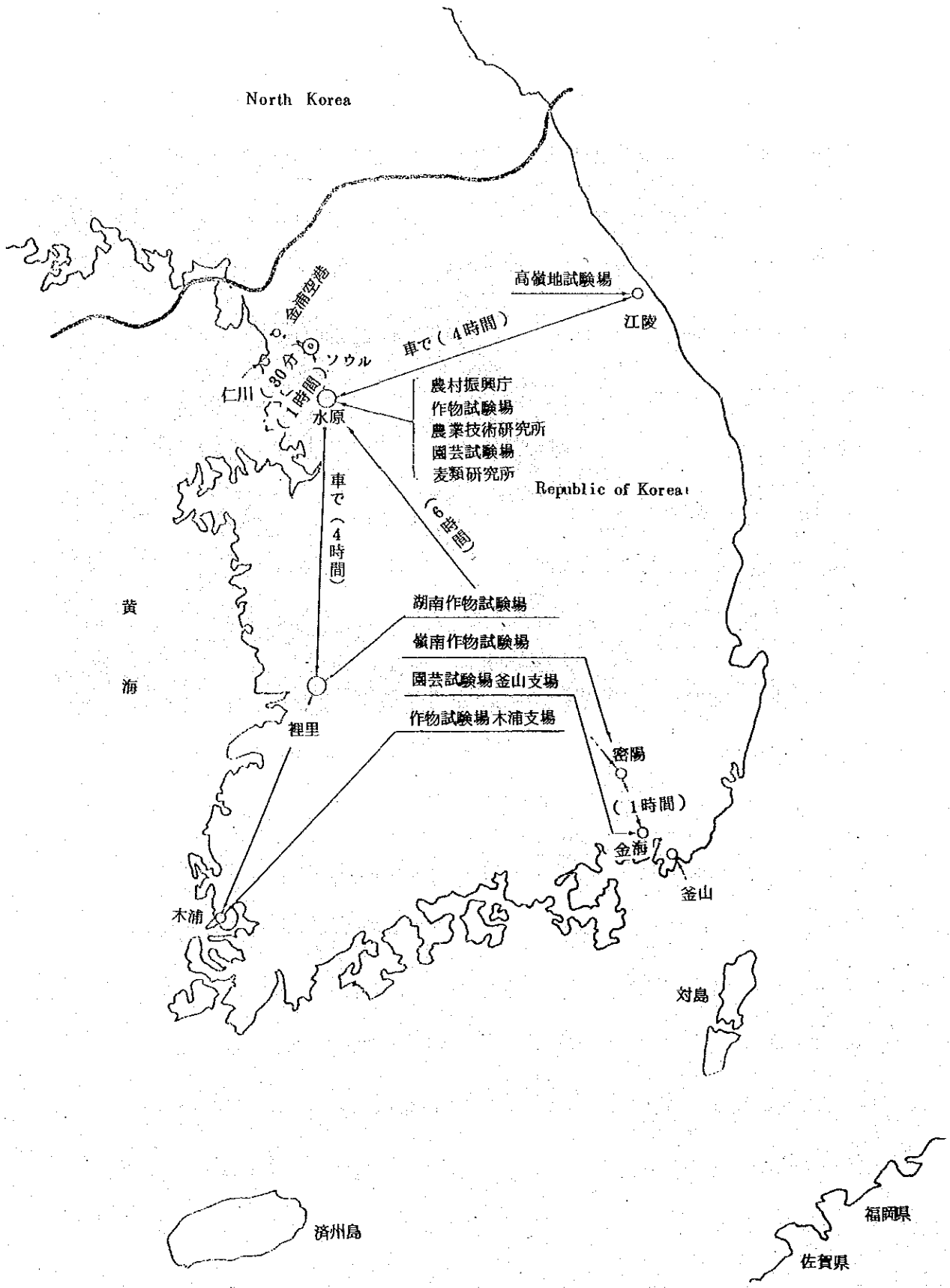




写真 - 1

第 3 次日韓農業共同研究 Follow up project

合同委員会において署名（昭和 5 6 年 4 月 1 4 日）

韓国側；^{キム ドン スー}金東秀農村振興庁試験局長

日本側；坪井八十二団長



写真-2

計画打合せチーム

柿崎団員，高井団員，清田団長，大久保団員，渡辺団員



写真-3

韓国側と計画打合せをする団員

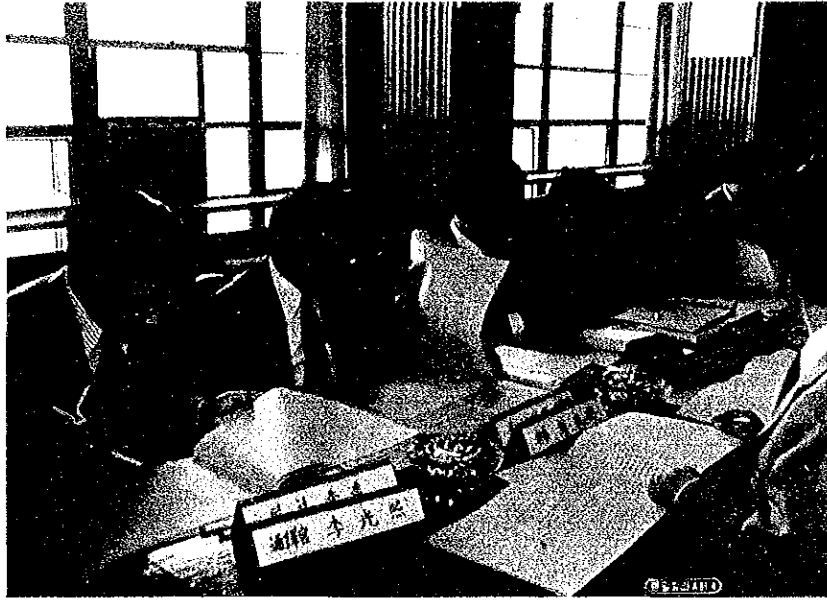


写真-4

合同委員会で計画の内容討議

目 次

あ い さ つ

は じ め に

プロジェクトの位置図

写真(計画打合せチーム)

第Ⅰ章 計画打合せチームの派遣	1
1 団 員 構 成	1
2 調 査 日 程	1
3 56年度事業実施計画	4
ア 試験研究課題	4
イ 専門家派遣計画	7
ウ 韓国側研究員受入	8
エ 供与既材	14
付-1 合同委員会における尹勤煥農村振興庁あいさつ	16
付-2 韓国側関係者リスト	18
付-3 農村振興庁機構表	20
第Ⅱ章 昭和56年度事業報告	21
あ い さ つ	21
1 団長 坪 井 八十二	22
2 派遣専門家帰国報告	62
(1) 増 田 澄 夫 麦類生理生態	62
(2) 小 松 良 行 水稻機械移植	66
(3) 柴 田 和 博 水稻の耐冷性育種に関する研究	81
(4) 小 澤 行 雄 施設園芸に関する研究	87
(5) 平 尾 重太郎 ウンカ類の発生予察に関する研究	97
(6) 柿 本 彰 水稻光合成	106
(7) 北 原 弘 一 空調設備の修理並びに点検調整	109
付録 韓国1980年冷害と今後の対策研究の方向 坪井八十二	118

1 団員構成

(1981年4月6日～4月17日, 12日間)

- 1 団長総括 清田安孝 農林水産省, 農林水産技術会議事務局 研究管理官
TEL 03-502-8111 内線 4426
- 2 協力企画 高井正夫 農林水産省, 経済局, 国際協力課, 技術協力第2係長
TEL 03-502-0897
- 3 研修企画 柿崎良夫 国際協力事業団, 研修事業部, 研修第1課, 課長代理
TEL 03-346-5153
- 4 機材管理 渡辺登生 国際協力事業団, 無償協力調達部, 機材第2課
TEL 03-346-5157
- 5 業務調査 大久保雅彦 国際協力事業団, 農業開発協力部, 農業技術協力課
TEL 03-346-5266

2 調査日程

日順	月日	曜	行程および事項
1	4.6	月	1. 東京 → 金浦 (JL951 13:00着) (チーム4名 高井、木戸崎、渡辺、大久保) 長田一等書記官、民辻二等書記官、趙在 研究管理課長、李光照通訳官空港出迎え。 2. 大使館表敬 (17:30～18:20) (西村参事官長田一等書記官、民辻二等書記官、チーム4名) 3. 東京 → 金浦 KE001 20:30着 (清田団長) 長田一等書記官空港出迎え ソール泊 4. 大使館主催夕食会
2	7	火	1. 農水産部 (柳 卓農業企画官、朴正潤農業局長 (千重仁国際協力担当官) 表敬 (11:00～12:00) (長田一等書記官、清田団長他チーム4名) 2. 移動ソール → 水原 水原泊
3	8	水	1. 農村振興庁 (尹勳煥庁長、陳正基企画管理官、金文憲一次長) (金東秀試験局長) 表敬 (坪井リーダー-清田団長他チーム4名) (9:00～12:00)

日順	月日	曜	行程および事項
4	9	木	2. 農業技術研究所(金萬壽所長)視察 (13:40~15:30) 概要説明, 所内視察, 帰国研修員との面談, 供与機材の利用状況調査および要望聴取 (趙研究管理課長李通訳官 坪井リーダー, 清田団長他チーム4名)
			3. 作物試験場(泳秀場長)視察 (15:40~17:00) 概要説明, 所内視察, 帰国研修員との面談, 供与機材の利用状況調査および要望聴取 (趙研究管理課長, 李通訳官坪井リーダー清田団長他チーム4名)
5	10	金	4. 韓国側主催夕食会 水原泊
			1. 移動 水原 → 扶 2. 扶 農村指導所(文技術担当官)視察, 概要説明 (11:00~12:00) 3. 湖南作物試験場(慎華場長)視察 概要説明, 場内視察, 帰国研修員との面談, 供与機材の利用状況調査および要望聴取 (趙研究管理課長, 李通訳官, 坪井リーダー, 清田団長他チーム4名) 裡里泊
6	11	土	1. 移動 裡里 → 雲峯 → 釜山 2. 湖南作物試験場雲峯出張所建設地視察, 黄冒団研究官, 概要説明 3. 慶尚南道農村振興院崔大雄試継局長 建設中の農村振興院の概要説明(11:30~12:00) 4. 慶尚南道農村振興院 柳漢俊院長より概要説明 (13:00~14:00) 5. 園芸試験場釜山支場(采敦支場長)視察 (17:25~18:30) 概要説明, 場内視察, 帰国研修員との面談 供与機材の利用状況調査および要望聴取 (趙研究管理課長, 李通訳官坪井リーダー, 清田団長他チーム4名) 釜山泊
			1. 移動 釜山 → 密陽 2. 嶺南作物試験場 朴敬場長 視察 (15:50~17:30) 概要説明, 場内視察, 帰国研修員との面談 供与機材の利用状況調査および要望聴取 (趙研究管理課長, 李通訳官, 坪井リーダー, 清田団長他チーム4名) 密陽泊
8	12	日	1. 団員打合(8:00~11:00) 2. 密陽 視察 3. 移動 大邱 → 水原 大邱泊
			1. 麦類研究所朴魯豊所長視察 (14:00~15:00) 2. 園芸試験場洪淳範場長視察 (16:00~17:00) 概要説明, 場内視察, 帰国研修員との面談 供与機材の利用状況調査および要望聴取 (趙研究管理課長, 李通訳官, 坪井リーダー, 清田団長他チーム4名) 水原泊

日順	月日	曜	行程および事項
9	14	火	<p>1. 合同委員会(10:00~11:40)</p> <p>韓国側 農村振興庁長 試験局長 農技研所長 園芸試験場長 尹勳煥 金東秀 金萬壽 洪淳範 麦類研究所長 産 協同調整官 研究管理課長 朴魯豊 襄聖浩 趙</p> <p>日本側 坪井リーダー, 清田団長, 高井, 柿崎, 渡辺, 大久保, 長田一等書記官 民辻二等書記官 水原泊</p>
10	15	水	<p>1. 韓日農業共同研究計画合同議事録署名</p> <p>韓国側 金東秀管理所長 日本側 坪井八十二研究団長 水原泊</p>
11	16	木	<p>1. 移動 水原 → ソール</p> <p>2. 農水産部柳鍾卓農業企画官帰国挨拶</p> <p>3. 大使館に最終報告, 帰国挨拶 ソール泊</p>
12	17	金	<p>1. 清田団長チーム4名帰国</p> <p>金浦発 (JL592 13:30) 東京着 (15:50)</p>

3 5 6 年度実施計画 (案)

ア 試験研究課題

研 究 課 題	項 目 数 (継 続)
I 作物の安全多収性品種に関する研究	3
	2
III 作物の栄養生理, 水分生理および生育に関する研究	1
III-1. 水稲の光合成能力と生産能力に関する研究	1
III-2. 水稲の水管理および水分生理に関する研究	1
III-3. 作物の栄養生理障害	2
III-4. 水田の水管理および物理性改善	2
III-5. 麦類生理生態に関する基礎的研究	1
IV 土壌肥料に関する総合的研究	1
V 野菜の生産増大と品質向上に関する研究	1
VI 作物保護に関する基礎および応用研究	3
VI-1. 水稲病害圃場抵抗性に関する研究	1
VI-2. 資源植物の主要 Virus 病の分類固定に関する研究	1
VI-3. ウンカ類の発生豫察に関する研究	1
計	19

研究課題	課題	項目	項目	継続・新規	実施機関	担当者
I 作物の安全多収性品種に関する研究	1. 水稻安全多収性品種に関する研究 2. 麦類の安全多収性品種に関する研究	1. 耐冷性品種育成 3. 米質改善 4. 耐病虫性品種育成	続	作物試験場	鄭根植, 朴錫洪, 李寿寬	
			"	"	"	
			"	湖南作物試験場 湖南作物試験場	李康世, 徐得竜, 鄭東熙	
			"	湖南作物試験場	"	
II 作物の栄養生理水分生理および生態に関する研究	1. 水稻の光合成能力と生産力に関する研究 2. 水稻の水管理および水分生理に関する研究 3. 作物の栄養生理障害 4. 水田の水管理および物理性改善 5. 麦類生理生態に関する基礎的研究	2. 登熟期間中同化能力 1. 水稻の省力機械栽培技術確立 2. 作物の栄養生理障害 1. 総合改良効果の要員判定 2. 土壌の物理化学要因と透水調節方法 2. 麦類の省力安全栽培法確立 3. 耐旱性の生理生態および旱魃対策	"	農業技術研究所	許一風	
			"	作物試験場	李鍾薫	
			"	農業技術研究所	許一風	
			"	"	任正男	
			"	麦類研究所	河竜雄	

研究課題	題目	題目	継続・新規	実施機関	担当者	
IV 土壌肥料の関する総合的研究	1. 水田土壌の地力増進に関する研究	1. 土壌有機物の分解集積と炭素の解明	継	農業技術研究所	許鶴亮	
VI 野菜の生産増大と品質向上に関する研究	1. 施設野菜に関する研究	3. 環境改善現地調査	"	園試・釜山支場	金在永, 崔周星, 金文深	
VII 作物保護に関する基礎および応用研究	1. 稲熱病耐病性に関する研究	1. 稲熱病菌生理型	"	農業技術研究所	李銀鏞, 崔庸哲	
		2. 白葉枯病の病原性分類	"	"	"	
		3. 稲熱病, 白葉枯病の耐病抵抗性	"	"	"	
VIII 資源植物主要 Virus 病の分類同定に関する研究	2. 資源植物主要 Virus 病の分類同定に関する研究	1. 主要作物 Virus 病分類同定	"	"	李淳煥	
		3. ウンカ類の発生豫察に関する研究	1. ウンカ, ココバイ類の発生動態と発生豫察	"	"	崔光烈
計	12 題目	19 項目				

イ 専門家派遣計画(案)

研究課題および題目	専門家		期間	実施機関
	姓名	所属		
I 作物の安全多収性品種育成に関する研究 1. 水稲品種育成	柴田和博	中国農業試験場	'81.7-9(2ヶ月)	作物試験場
	鳥山國士 小松良行	東北農業試験場 四国農業試験場	'81.8(3週間) '81.5-6(2ヶ月)	作物試験場 "
III 作物の栄養生理, 水分生理および生体に関する研究 1. 水稲光合成と生産力 2. 水稲機械化栽培	小沢行雄	野菜試験場	'81.7(8週間)	園芸試験場
	平尾重太郎	九州農業試験場	'81.8-9(2ヶ月)	農業技術研究所
VI 野菜の生産増大と品質向上に関する研究 1. 施設野菜				
VII 作物保護に関する基礎および応用研究 1. ウンファン類				

ウ 研究員受入

フォローアップ最終年次における研修員受入計画につき打合せの結果、合同委員会決議は次のとおりである。

昭和56年度において短期視察研修員1名および長期技術研修員4名の計5名の受入を決定した。

この結果、本プロジェクトの研修員受入事業は、最終年次の予定を含め、我国の農業事情、試験研究制度の視察ならびにプロジェクトの打合せを主目的とする短期研修員21名（受入期間約3週間）、研究課題にもとづき主に農林水産省試験研究機関に研修を委託した長期研修員58名（受入期間約1年間）の計79名の受入実績を有することになった。

帰国研修員については、昭和53年度派遣のエバリエーションチームが、アンケート他の方法により詳細な効果測定を行っており、また今回の打合せチームの主目的でないため、系統的な調査、聴取等は実施しなかったが最終年次の受入計画の参考に資するため、可能な限り多くの帰国研修員に面談ならびに現職、研究内容等を照会した。

帰国研修員の我国における研修成果についての諸意見はエバリエーションチームの調査結果とかけはなれたものでなく、とくに長期研修員の場合、韓国側の適確な研修候補者選考、日本語に対する適応能力、研修期間、ならびに受入機関の指導体制等が整い、極めて満足すべき結果をもたらしていると言える。

本プロジェクトの長期研修員の受入期間は、一律1年間と定め、実行されてきたが、研修内容に応じ期間に幅を持たせた方が良い。また年末年始の一時帰国制度の採用、研修成果、レポートの印刷化、再研修の希望、学位取得制度のルール化等について意見、要望がなされた他に目立った不満等は聞かれなかった。

参考のため、受入実績表を別添したが、現職欄に見られるとおり帰国研修員に転職および専門研究職以外への配置転換の例は少なく、日本での研修結果が各所属機関等に浸透、生かされていることが十分うかがえた。

研 修 員 受 入 実 績

I 短期視察研修員

受入年度	氏 名	所 属 ・ 役 職	研 修 期 間	現 職 (1981年4月現在)
1974	金 寿	農林振興庁試験局長	1975. 3.25 ~ 1975. 4.14	農業技術研究所長
	洪 範	済州試験場長	"	園芸試験場長
	張 淳	慶北振興院試験局長	"	慶北振興院試験局長
	朴 重	農業技術研究所昆虫担当研究官	"	農業技術研究所昆虫担当研究官
	李 鐘	農林振興庁試験局研究官	"	(退職・米国移住)
1975	冰 秀	農村振興庁試験局長	1975.10.13 ~ 1975.11. 2	作物試験場長
	安 奉	作物試験場副場長	"	志南大学校農科大学教授
	柳 漢	慶南振興院試験局長	"	慶南振興院長
1976	聖 浩	嶺南作物試験場長	1976.10.12 ~ 1976.11. 1	産学協同調整官
	金 東	農村振興庁研究調整官	"	農村振興庁試験局長
	鄭 鳳	農業技術研究所高理課長	"	(死 亡)
	朴 魯	湖南作物試験場長	1977. 9. 5 ~ 1977. 9.25	麦類研究所長
1977	李 寿	嶺南作物試験場水稻担当研究官	"	嶺南作物試験場水稻担当研究官
	李 殷	麦類研究所水稻栽培担当研究官	"	麦類研究所大麦研究担当官
	朴 潤	農村振興庁試験局研究調整官	1978. 6.15 ~ 1978. 7. 5	農水産部農産局長
1978	朴 尚	園芸試験場金海支場長	"	園芸試験場菜蔬第2科長
	金 正	農村振興庁試験局研究管理課	"	農村振興院試験局研究管理課首席係長
	金 文	農村振興庁次長	1979. 9.27 ~ 1979.10.10	農村振興庁次長
1979	朴 英	農村振興庁試験局研究管理課長	"	農業技術研究所理化学課長
	朴 善	農村振興庁第1研究調整官	1980. 6. 2 ~ 1980. 6.22	農村振興庁第1研究調整官
1980	慎 来	農村振興庁第1研究調整官	1981. 9.16 ~ 1981.10. 3	—
1981 (予定)	朴 来	嶺南作物試験場長		

II 長期技術研修員

受入年度	研究課類	研修内容	氏名	所属	研修期間	研修機関	現職(1981年4月現在)	
1974	I	水稻品種育成	李相敬	作物試験場	1975.3.28~1976.3.27	青森県農業試験場藤坂支場	作物試験場教原出張所長	
	III	水稻水管理	李相敬	"	"	農業技術研究所	" 南陽出張所	
	IV	水田土壌地力増進	李相尚	農業技術研究所	1975.3.28~1976.4.10	"	農業技術研究所米養生理科	
	VI	施設園芸	朴尚昌	園芸試験場	1975.3.28~1976.3.27	野菜試験場	園芸試験場菜蔬第2科長	
	VII	ウイルス病	柳安相	慶尚南道農村振興院	"	九州農業試験場	慶尚南道農村振興院植物病理科長	
	IV	水田土壌地力増進	崔大庸	農業技術研究所	1975.7.1~1976.6.30	北陸農業試験場	農業技術研究所農化学研究科	
	IV	開墾地土壌保全	崔大庸	"	"	四国農業試験場	慶尚南道農村振興院試験局長	
1975	VII	水稻病害	崔麟光	"	"	九州農業試験場	農業技術研究所病理理科	
	VI	施設園芸	崔麟光	園芸試験場金海支場	1975.9.1~1976.8.31	野菜試験場久留米支場		
	VII	ウンカ類	崔海龍	農業技術研究所	1975.10.5~1976.10.4	中国農業試験場		
	I	水稻品種育成	崔河亨	作物試験場	"	農事試験場	作物試験場水稻育種科	
	I	麦類品種育成	崔河亨	"	"	中国農業試験場	麦類研究所小麦栽培研究科長	
	I	"	彼宗永	嶺南作物試験場	"	九州農業試験場	(日本南研修中)	
	V	雑草防除	李宗永	湖南作物試験場	1975.11.4~1976.11.3	"	作物試験場木浦支場	
	1976	I	大豆品種育成	洪般範	作物試験場	1976.6.10~1977.6.9	愛野県総合農業試験場	作物試験場田作物研究科
		IV	水田土壌地力増進	許寬	嶺南作物試験場	"	農業技術研究所	農業技術研究所土壌化学研究科
		VI	施設園芸	崔慶成	園芸試験場	"	野菜試験場	園芸試験場菜蔬第2科
III		水稻光合成	朴慶成	嶺南作物試験場	1976.7.1~1977.6.30	北陸農業試験場	嶺南作物試験場水稻研究科	
III		水稻米養生	金昭圭	農業技術研究所	"	北海道農業試験場	作物試験場米養生課	
V		雑草防除	崔承基	作物試験場	"	農事試験場	忠清南道農村振興院作物科長	
III		作物生理生態	陳文文	試驗局	1976.10.1~1977.3.31	農業技術研究所	嶺南作物試験場水稻研究科	
I		水稻品種育成	崔承基	嶺南作物試験場	1976.11.20~1977.11.19	農事試験場	農業技術研究所昆虫科	
VII		ウンカ類	李承基	農業技術研究所	1977.1.10~1977.12.20	九州農業試験場	作物試験場特用作物科	
II		水稻米養生	李承基	"	1977.3.20~1978.3.19	"		
III		水田土壌水管理	崔承基	"	1977.7.5~1978.7.4	"	農業技術研究所土壌物理科	

受入年度	研究課題	研究内容	氏名	所屬	研修期間	研修機関	現職(1981年4月現在)
1976	II	特異酸性土壌改良	李漢生	慶尚南道農村振興院	1977. 7. 5 ~ 1978. 7. 4	北陸農業試験場	慶尚南道農村振興院試験局
1977	VI	施設園芸	金文秀	園芸試験場金山支場	"	野菜試験場	園芸試験場金山支局
	I	麦類品種育成	李康世	湖南作物試験場	"	九州農業試験場	湖南作物試験場
	II	根糸障害	許燦	作物試験場	1977. 9. 26 ~ 1978. 5. 25	農業技術研究所	(転職・人煙草研究所)
	V	雑草防除	張映光	嶺南作物試験場	1977. 9. 26 ~ 1978. 9. 25	農事試験場	嶺南作物試験場
	VI	高冷地野菜	池鉦	高嶺地試験場	"	北海道農業試験場	高嶺地試験場園芸科
	I	水稻品種育成	金鍾銀	作物試験場	1977.12. 1 ~ 1978.11.30	九州農業試験場	作物試験場水稻育種科
	VI	水稻病害	李鍾銀	農業技術研究所	1978. 1.10 ~ 1978.12.24	農事試験場	農業技術研究所病理科
	III	水稻光合成	李鍾銀	作物試験場	1978. 3.10 ~ 1979. 3. 9	農業技術研究所	作物試験場水稻栽培科
	III	水稻光合成	孫洋	嶺南作物試験場	1978. 6.22 ~ 1979. 6.21	北陸農業試験場	嶺南作物試験場
	III	水稻米養生	金有	農業技術研究所	"	農業技術研究所	農業技術研究所
1978	IV	地力増進	俞益	"	"	"	(日本留学中)
	VI	施設園芸	東光	園芸試験場金山支場	1978. 7. 6 ~ 1979. 7. 5	野菜試験場	園芸試験場金山支局
	III	麦類生理生態	倫復	麦類研究所	1978.10. 2 ~ 1979.10. 1	農事試験場	忠清北道農村振興院試験局
	IV	開墾地土壌保全	延圭	農業技術研究所	"	四国農業試験場	農業技術研究所土壌物理科
	VI	施設園芸	金永	園芸試験場金山支場	"	野菜試験場	園芸試験場菜種第2科
	I	水稻品種育成	權泳	湖南作物試験場	1979. 2. 1 ~ 1980. 1.30	九州農業試験場	湖南作物試験場水稻育種科
	I	大豆品種育成	朴文	"	1979. 2.20 ~ 1980. 2.19	東北農業試験場	湖南作物試験場
	III	麦類生理生態	申万	麦類研究所	1979. 3. 1 ~ 1980. 2.29	中国農業試験場	麦類研究所大麦科
	IV	地力増進	鄭永	農業技術研究所	1979. 3.11 ~ 1980. 3.10	農業技術研究所	農業研究所農化学科
	III	水稻機械省力化栽培	尹大	作物試験場	1979.10. 1 ~ 1980. 9.30	農事試験場	作物試験場水稻栽培科
	VI	施設園芸	金光	園芸試験場金山支場	"	野菜試験場	園芸試験場菜種第2科
	VII	ウイルス病	崔文	農業技術研究所	1980. 1.10 ~ 1980.12.25	植物ウイルス研究所	農業技術研究所病理科

受入年度	研究課題	研究内容	氏名	所属	研修期間	研修機関	現職(1981年4月現在)
1979	III	麦類品種育成	申 徹	嶺南作物試験場	1980.1.10 ~ 1980.12.25	東北農業試験場	嶺南作物試験場田作物研究科
1980	III	麦類生理生態	徐 亨	"	1980.5.8 ~ 1981.4.30	農業技術研究所	—
	III	水稻水管理	李 康	農業技術研究所	1980.6.15 ~ 1981.6.14	北海道農業試験場	—
	III	麦類生理生態	南 潤	麦類研究所	1980.11.24 ~ 1981.11.23	農事試験場	—
	V	施設園芸	崔 周	園芸試験場釜山支場	1980.12.1 ~ 1981.11.30	野菜試験場	—
	IV	土壌肥料	柳 震	農業技術研究所	1981.3.30 ~ 1982.3.25	九州農業試験場	—
1981 (予定)	VI	ウンカ類	坂 基	"	1981.7.9 ~ 1982.7.8	"	—
	I	水稻品種育成	高 在	嶺南作物試験場	1981.7.16 ~ 1982.7.15	農事試験場	—
	VI	施設園芸	鄭 鎬	園芸試験場	1981.9.30 ~ 1982.9.29	野菜試験場	—
	III	水稻機械化栽培	盧 承	全北農村振興院	1981.10.6 ~ 1982.10.5	北陸農業試験場	—

(参考) 年度・研究課類別研修員受入実績(長期のみ)

研究課 類別 年度	I 作物安定多収性品種 に関する研究	II 水稻低位生産地の土 壌および肥料研究	III 作物の栄養生理、水 分生理および生態研 究	IV 土壌の生産力に関す る総合研究	V 雑草防除に関する研 究	VI 野菜の生産増大およ び品性向上に関する 研究	VII 作物保護に関する基 礎および応用研究	受入人数 計
1974	李 相 場		李 敬 熙	李 相 奎		朴 尚 根	柳 昌 栄	5人
1975	崔 海 龍 雄 河 龍 亨			安 相 大 崔	李 宗 永	柳 麟 哲	崔 庸 哲 崔 烈	9人
1976	洪 殷 永 陳 永 六	李 承 宅	朴 慶 成 圭 睦 權 七 泰 熙	許 範 亮	金 昭 年	崔 寬 淳	崔 貴 文	10人
1977	李 康 生 昊 金 永 根	李 漢 生 輝 許	嚴 李 泰 熙 孫 金 延 申		張 映 熙	金 文 光 敏 池 倫 杉	李 銀	10人
1978	崔 永 文 朴 文 根		洋 姿 復 均 有 圭 方 大 徹	俞 益 東 永 金 鄭		權 光 永 金 光 勇	崔 容 文	4人
1979			尹 申 斗 徐 李 南 萬 一 杓			崔 周 星		5人
1980			徐 李 南 萬 一 杓 感 承 杓	柳 麗 彰				4人
1981 (予定)	高 在 哲					鄭 鏞 鎬	啟 基 白	4人
受入人数 計	11人	8人	16人	8人	8人	10人	7人	58人

エ 供 与 機 材

既供与機材のパーツの内緊急に必要とする品と機材本体で耐用年数、使用度から見て交換を余ぎなくされている機材を中心に各試験場をと同調査、その結果を基に韓側と協議選定し、これを本プロジェクトの最終年度に反映させるべく実施した。

全体的に供与機材の整備、維持、保管状態は良好である。古い機材になると部品の交換、修理等で大分手を加えている事もあって、分析、測定のパーツの正確さは若干なりとも心もとないものもある。

パーツの交換にしても日本のメーカーでは既にモデルチェンジ等で過去の機材になっているものもいくらかあった。

以下具体的に調査の方法を記す。

1. 本調査団出発前に機材管理担当の目的を韓側に伝え各試験場面の問題点と要求機材パーツ等の検討方を事前に通知した。
2. 各試験場ではこのリストを基に個々の機材について現物を見ながら説明を受け、意見交換をした。

以上の方法で予定した7ヶ所の試験場を駆け足であったか調査し、これを水原に持ち帰り、要求内容も検討した。全体的に要求度の高いパーツは各試験場ともほぼ共通して、分払、測定機材が上位を占めている、これらの機材は他に比べ使用頻度が高く消耗度が早い事とパーツ類の入りが、韓側では水原に困難な事があげられよう、その他のパーツ類にも同様にプロジェクト遂行上必要なものばかりである。しかしながら相当量になるところから全て供与可能かの是非については不問にし優先順位につける事で相互が了解した。

各試験場を回りながら特に要望のあった作物試験場の人工気象室(ファイトロン)について述べると次のようになる。本システム機材は移動して既に10年を経過しており構成機器は耐用限度ギリギリであえぎながら機能している。構成機器の性能低下に伴う、制御精度の悪化、照度低下及び部分的な故障がいたるところに現出しており、特にこのシステムの心臓部分に当たる自動制御システムは構成計器自体の機能の低下が著しく、早急に機器交換、更新及び保守整備が必要である。ところが、この部分は既に新型計器に改良、モデルチェンジされている。したがって全面改修が緊急と考慮される。このシステム機材は韓国における唯一の人工気象室であり近年続いている冷害対策とのからみから見れば、この試験場での研究成果が、今後の韓国農業の進路をも占うキーポイントになる事は必至である。かかる事態を考えるに本プロジェクトが、比較的効果をあげている模範的なプロジェクトと評価されている根拠の部分になるところからかかる自体を最大限考慮し特段の配慮をもって最終年度にこのシステムを供与出来れば、いやましてこのプロジェクトが歴史の流れの中で大きな区別をつける事になると考える。

プロジェクトと評価されている根拠の部分にあるところから規定概念にとられる事なく積極的に検討をし特段の配慮をもって最終年度にこのシステムを供与出来れば、いやましてこのプロジェクトが歴史の流れの中で大きな区別をつける事になると考える。

韓日農業共同研究計画
合同委員会 委員長
大韓民国農村振興庁長
農学博士 尹 勤 煥

合同委員会 (1981年4月14日) におけるあいさつ

本日、韓日農業共同研究 Follow up Project 第3次合同委員会の開催にあたりまして私は清田団長ならびに日本側代表の皆様の御来庁を心から歓迎申し上げます。

韓日農業共同研究事業は両国政府間で締結された条約に基づき、韓国の農業生産性向上を図るための共同研究として1974年 月7日から5ヶ年計画で遂行されてきましたが、同事業の一部未解決分野に対する延長の必要性が認められ、1979年4月2日に Follow up project で縮小遂行することに合意し、両国政府間で討議議事録署名がなされました。今回は本プロジェクト最終年度にあたり、本日第3次合同委員会の開催を迎えることとなりました。

過去7年間における本共同研究事業は、試験研究分野の新技术情報交換と資機材の供与及び専門家の交流等脆弱分野の技術開発に大きく寄興したばかりでなく、農業試験研究事業の質的向上に大きな役割を果たしたものと確信致しております。

また両国専門家の隔意の無い討論と意見の交換をするという研究協力体制は本事業発展のための立派な契機となりましたものと自負するところであります。

皆様もご存知のように最近の国際情勢は産油国の石油武器化のため、世界の経済は予測できない状態に変せんし、更に世界に到るところでは、気象異変による農作物の収量が平年作を下廻る等、複雑さわまる問題点を露出している実情であります。このような諸点を勘案するとき、農業研究者の立場では何よりも新資源、新技术の開発による食糧の自給自足を促進すべきであるとの使命感にうたれるものであります。

その間国際協力を通じて、食糧作物の品種改良、栽培法の改善病虫害防除等の分野における研究成果を高めることに貢献した貴国専門家の積極的な技術協力に対して深甚なる謝意を表すところであります。

更に新技术発展の面からみる時、作物の気象災害対策および畜産振興等解決すべき問題点は、数多く、新技术の開発は急を要する実情にあります。私はこの分野に対する貴国の研究協力を、ひきつづき期待するところであります。

本日、この委員会は両国の代表が友好的な雰囲気の中で80年度の事業結果の評価と81年度の事業計画に対して真剣な討議は勿論 Follow up Project の総仕上げと、研究協力体制の持

続的発展のための対話の広場となることをお望み致します。

最後に本委員会のために御参席いただきました清田団長はじめ、日本代表の皆様のご健勝を祈念いたします。

ありがとう御座います。

相手国等関係者

1) 韓国側関係者

農学博士	尹 勤 煥	農村振興庁長
農学博士	金 東 秀	農村振興庁 試験局長
	柳 鍾 卓	農水産部 農業企画官
	朴 正 潤	農水産部 農産局長
	陳 正 基	農村振興庁 企画管理官
農学博士	襄 聖 活	〃 産学協同調整官
〃	趙 在	〃 試験局研究管理課長
〃	柳 震 彰	〃 農業技術研究所
	俞 益 東	〃 〃
農学博士	李 銀 鍾	〃 〃
〃	咸 泳 秀	〃 作物試験場長
〃	朴 魯 豊	〃 麦類研究所長
	申 萬 均	〃 麦類研究所
	安 完 植	〃 〃
農学博士	朴 夾 敬	〃 嶺南作物試験場長
	高 在 哲	〃 嶺南作物試験場
	洪 淳 範	〃 園芸試験場長
	采 敦	〃 園芸試験場釜山支場長
	慎 華	〃 湖南作物試験場長
	朴 錫 洪	〃 湖南作物試験場
	黄 昌 周	〃 〃
	柳 漢 俊	慶尚南道農村振興院長
理学博士	崔 大 雄	慶尚南道農村振興院試験局長
	金 年	全羅北道農村振興院試験局長
	李 光 熙	韓日農業共同研究団通訳官

2) 日本側関係者

在大韓民国日本側大使館

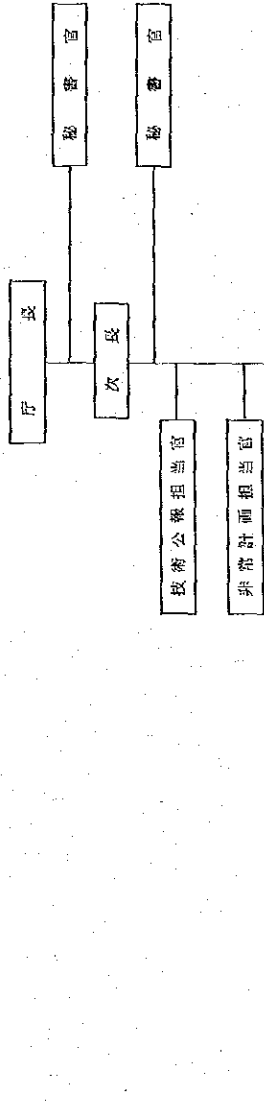
西 村 元 彦 参 事 官

長 田 綏 男 一 等 書 記 官

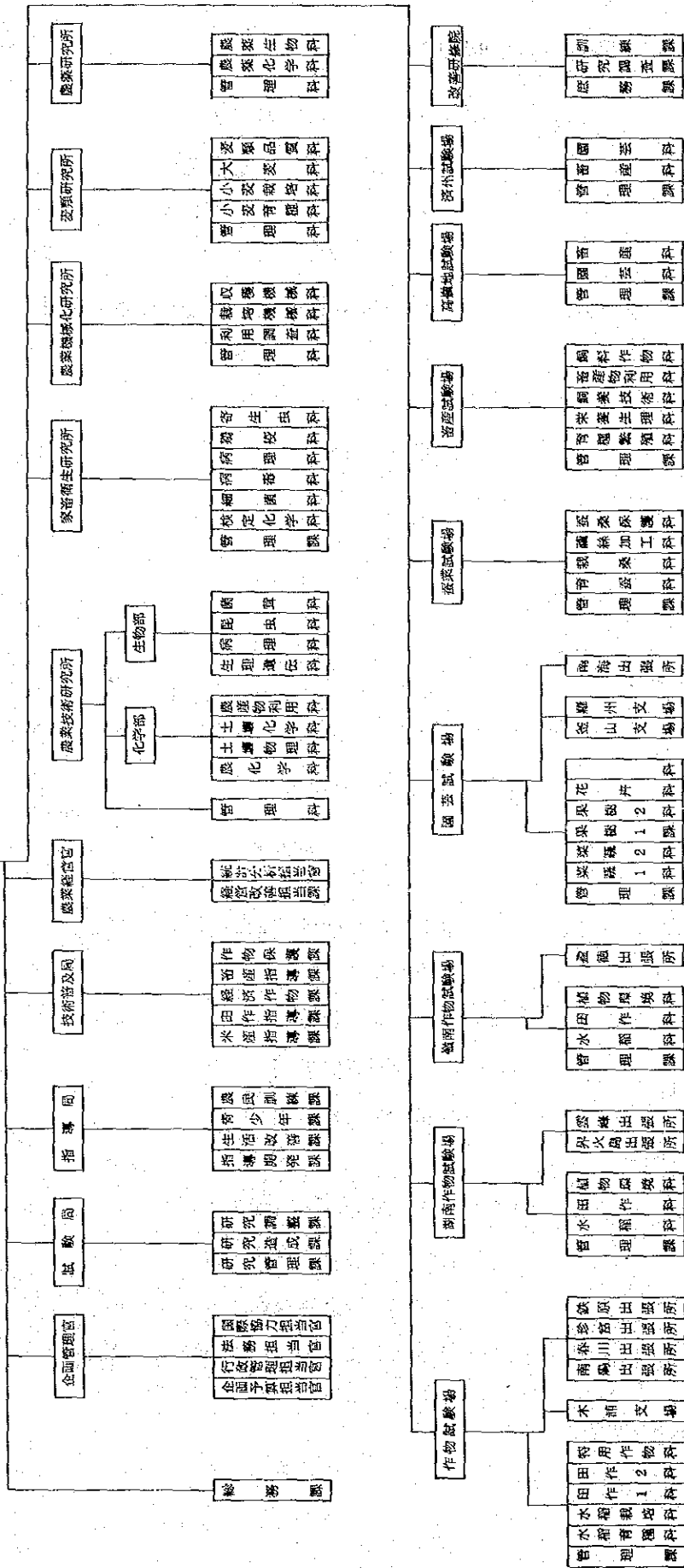
民 辻 秀 逸 二 等 書 記 官

農 学 博 士 坪 井 八 十 二 日 韓 農 業 共 同 研 究 団 団 長

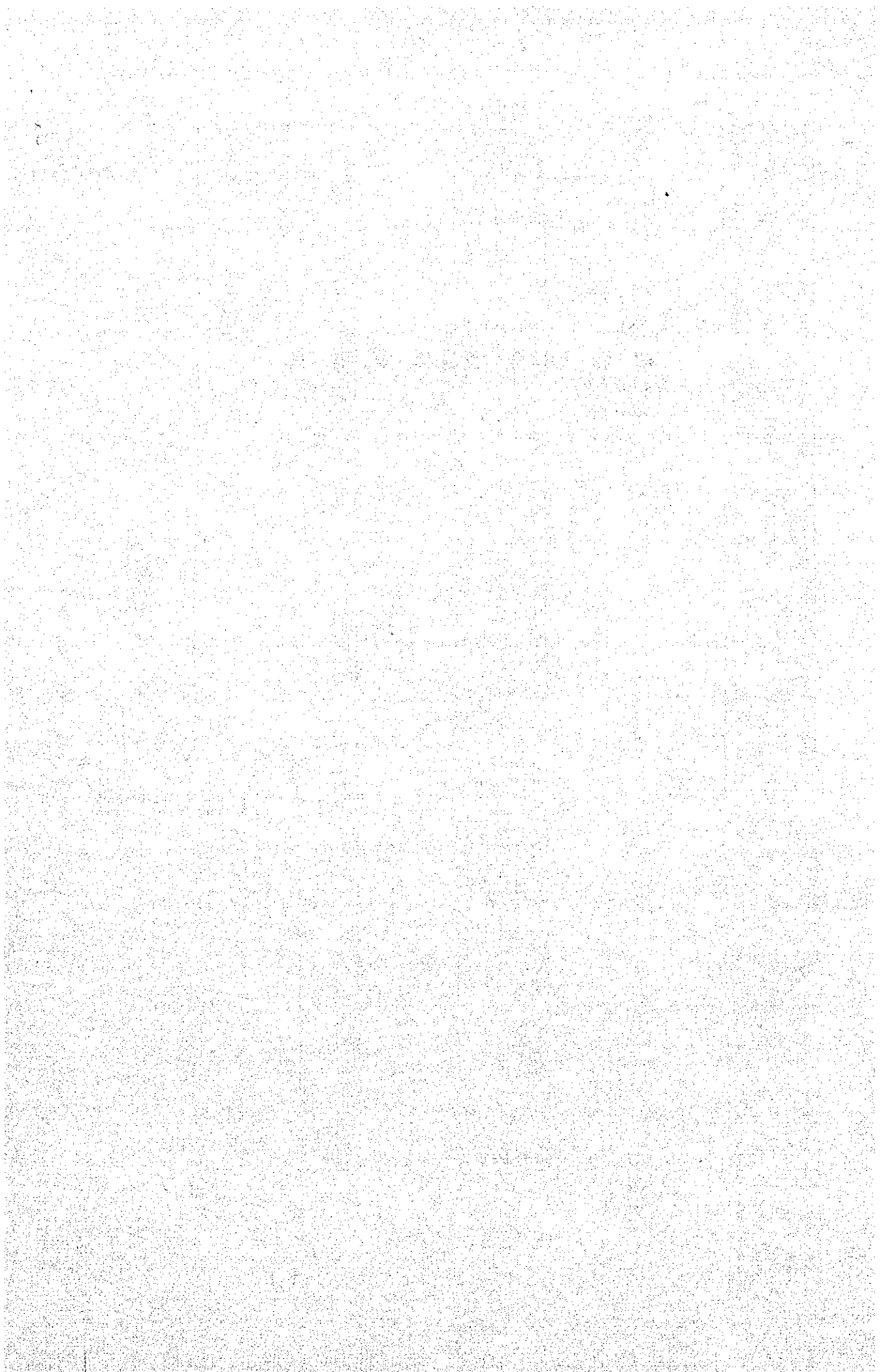
農 村 振 興 行 機 構 表



級別	1	2	3	4	5	6	7	8
職名	主任	副主任	課長	係長	主任	主任	主任	主任
定員	1	3	1	22	82	236	526	79
合計	1,651							
備註	1,651							



昭和56年度事業報告



あ い さ つ

本プロジェクトは、昭和49年6月7日から5ヶ年間の協定による研究協力を終了後引き続き昭和54年4月2日に署名された「農業に関する日韓共同計画の実施のための技術協力に関する日本側策定チームと大韓民国政府当局との間の討議議事録」に基づき、昭和57年3月31日まで協力実施中のプロジェクトである。

本プロジェクトの特色として以下の点があげられる。

1. 両国の気候、風土及び栽培作物が似ているため日本での研究手法及び成果が韓国において適用しやすいこと。
2. 専門家の派遣期間が約1ヶ月ないし3ヶ月を短期間など 国内における第一線の研究者を派遣していること。
3. 来日する研修員に韓国側が日本語検定試験を徹底しているため日本国内での研修成果が充分あがっていること。併せて韓国においても管理者ならびにカウンターパートが日本語に堪能なため、専門家の指導及び助言が十分に伝達されていること。
4. 日韓農林水産技術協力委員会及び計画打合せチームの派遣により毎年度のプロジェクト実施計画を綿密に打合せ、さらに両国関係機関が順調に実施していること。

このような特色により本プロジェクトは着実に十分な成果をあげていると言える。

本プロジェクトの業務報告書は協力実施以来各年度毎にとりまとめたが本年度も年度内派遣専門家業務報告を主体としてとりまとめた。

本報告書が大韓民国における農業の生産力の向上に寄与することを願うものである。

執筆していただいた本プロジェクト坪井八十ニリーダー増田澄夫、小松良行、柴田和博、小澤行雄、平尾重太郎、柿本彰、北原引一各専門家の御協力に謝意を表するとともに御協力を賜りました外務省及び農林水産省並びに大韓民国の関係各位に対し厚くお礼を申し上げます。

昭和57年2月

国際協力事業団
農業開発協力部

村田稔尚

昭和56年度事業報告

韓国農業研究協力

坪井 八十二

1 昭和56年度事業実績について

81年3月10日～12日の東京における第13次日韓農林水産技術協力委員会を受けて、本プロジェクトに関する「Follow up 第3次日韓農業共同研究合同委員会」が81年4月14日農村振興庁（水原市）で開かれた。

この合同委員会において、56年度事業計画が具体的に検討され、日韓両国の代表間で合議調印された。

この報告はこの合同委員会で決議された56年度計画と対比しながら、56年度事業実績を報告する。

(1) 研究課題・項目

研究課題は Follow up 期間に定められた5課題について前年同様に実施された。

各課題に属する研究題目および研究項目は合同委員会計画の通り、それぞれ12題目19項目について実施された。

表-1 56年度研究題目と研究項目数（計画と実績）

研究課題	研究題目	項目数		
		計画	実績	増減
I 作物の安全多収性品種に関する研究	I-1 水稻安全多収品種	3	3	
	I-2 麦類安全多収品種	2	2	
III 作物の栄養生理、水分生理および生態に関する研究	III-1 水稻光合成	1	1	
	III-2 水稻水管理	1	1	
	III-3 作物栄養生理	1	1	
	III-4 水田物理性改善	2	2	
	III-5 麦類生理生態	2	2	
IV 土壌肥料に関する総合的研究	IV-1 水田地力増進	1	1	
V 野菜の生産増大と品質向上に関する研究	V-1 施設野菜	1	1	-1
VII 作物保護に関する基礎および応用研究	VII-1 病害圃場抵抗性	3	3	
	VII-2 Virus 病分類同定	1	1	
	VII-3 ウンカ発生予察	1	1	
計	12 題目	19	19	0

(2) 日本側専門家の来韓

56年度日本から派遣された専門家は表-2の通りである。

表-2 日本専門家派遣(計画と実績)

課 題 題 目	計 画			実 績			実施機関
	氏 名	所 属	期 間	氏 名	所 属	期 間	
I-1	柴田 和博	中国農試	81.7~9 2ヶ月	同 左	同 左	81.7.17~ 9.16	作 試
III-1	鳥山 国土	東北農試	81.8 3週間	柿本 彰	農 事 試	81.8.7~ 8.20	作 試
III-2	小松 良行	四国農試	81.5~6 2ヶ月	同 左	同 左	81.5.20~ 7.16	作 試
VI-1	小沢 行雄	野 菜 試	81.7 3週間	同 左	同 左	81.7.27~ 8.16	園 試
VII-2	平尾重太郎	九州農試	81.8~9 2ヶ月	同 左	同 左	81.8.4~ 10.3	農 技 研
I-2				増田 澄夫	農 事 試	81.3.25~ 4.24	麦 研

註1. III-1の鳥山は日本側の都合により柿本に変更になった。

2. I-2の増田は80年の計画である。

昨年度来韓した部長級専門家の提言の中に、水稻耐冷性育種、水稻機械移植栽培、ウンカ類の発生予察の補完が最終年度重要であるとの指摘があるので、専門家の派遣はこの3分野に限定した。

他の分野については水稻育種・生産力、土壌肥料、施設園芸、病害分野の部長級専門家派遣による当該分野の総括を計画したが、合同委員会でこれは水稻育種・生産力、施設園芸の2分野に削減された。

(3) 韓国側研修員の日本派遣

1) 視 察 団

本年の視察団は表-3に示すように1名であったが、極めて有益であったとの報告を受けた。

表-3 視察団の日本派遣(計画と実績)

区 分	計 画				実 績	
	氏 名	所 属	職 級	期 間	氏 名	期 間
団 長	朴 来 敬	嶺南作試場	長	3 週 間	同 左	81.9.18~ 10.4

2) 研 修 員

56年度の韓国側から日本へ派遣された研修員は表-4の通りである。

表-4 研修員の日本派遣(計画と実績)

題目・分野	計 画			実 績			
	氏 名	所 属	研修機関	氏 名	所 属	研修機関	研修期間
I - 1	高 在 哲 (李在吉)	嶺南作試	農事試験場	同 左	同 左	同 左	81. 7. 16 82. 7. 15
III - 2	盧 承 杓 (吳潤鎮)	全 北 道 農村振興院	北陸農試	同 左	同 左	同 左	81. 10. 6 82. 10. 5
VI - 1	鄭 錫 (洪 喜)	園芸試験場	野菜試験場	同 左	同 左	同 左	81. 10. 2 82. 10. 1
VII - 3	敬 基 白	農 技 研	九州農試	同 左	同 左	同 左	81. 7. 9 81. 7. 8
IV - 1	高 載 英 (柳震昌)	研究管課	九州農試	柳 震 昌	農 技 研	九州農試	81. 3. 30 82. 3. 25

(注) IV-1の柳震昌は55年度派遣分(現在滞日中なので、記載した)。

計画では研修候補者は日本語の国家試験を考慮し、正副2名ずつあげられていたが、本年度は正候補者4名が計画通り派遣された。

(4) 供興資機材

55年度分の残りが表-5の通り到着した。

表-5 供興機材(計画と実績)

到 着 日	資 機 材 名 お よ び 数 量	備 考
81. 4. 28	Recorder for Spectrophotometer 1個	既供興機材 部品(農技研)
〃	Lamp for Balance 12個	〃(麦研)
〃	Spray With Air Tanfe 10個	〃(農技研)
〃	Parts for copy Machine	〃(試験局)
〃	Parts for Gasehromato-graph	〃(農技研)
〃	Parts for Seeder	〃(麦研)
〃	農業気象綜合記録装置 1台	新規機材(作試)
81. 6. 29	耕耘機着用薬剤撒布機 4個	作試2個 湖試験試 各1個

56年度分の供與機材は現時点では未到着であるが、購送品目は表-6の予定である。

表-6 56年度供与資機材予定表

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単 価	金 額
1.	原子吸光分光光度計	日 立			
	Model 207				
	Cathod Lamp Ca-Mg K, Fe, Mn, Zn, Na 各1		1 式		299,000
	Automizer (Pt)		1		37,600
	Gas Burner Head		1		91,300
	Model 208	"			
	Cathod Lamp, Ca-Mg K, Fe, Mn, Zn, Na, Ni, Cu 各1		1 式		380,000
	Automizer (Pt)		1		39,600
	Gas Burner head		1		91,300
	光 電 管 R456A		1		72,600
	Model 170-30				
	Cathod Lamp, Ca-Mg K, Fe, Mn, Zn, Na, Mo Si, cd 各1		1 式		440,000
	Automizer (Pt)	1		52,600	
	gas Burner head	1		82,500	
	Reccrding paper (チャート)	10	1,430	14,300	
	Ink (赤色)	3	800	2,400	
	Capillary	5	2,700	13,500	
2.	Amino 酸 分析計	日 立			
	Model : KLA-5				
	交換樹脂 (No2612)	6	57,000	342,000	
" (No2611)	6	57,000	342,000		
高速冷却遠心分離器	"				
Model : 18 R-3					

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
	50 SSチューブ(2ヶ入)		3	13,000	39,000
	土壌脱水		5	14,000	70,000
	無菌箱用パーツ Model: CCV	〃	セット 1		48,500
	◎オプション部品				
	ジャバラダクト				
	固定 Belt				
	折気 Fan				
	フランジ				
	M4 Nut				
	M4 spring カッシャー				
	M4 平ワッシャー				
	◎H830A ヘパフィルター	〃	6	55,000	330,000
	Spectro photo meters Model: 100-10	〃			
	100-10 形, ガラスセル		5	33,000	165,000
3	興豊気象総合記録装置	飯尾電機			
	Model: AMR1702B				
	標準直流電圧発生機 TR-6120		1		1,878,000
	地下熱流計 コード30m付 TS-CN-81		1		200,000
4	Gas chromatograph	島津			
	Model: GC-6A				
	充填剤				
	1. EGA(D-66)100ml		1		17,000
	2. DEGS+H ₂ PO ₄ (D-74)		1		13,000
	3. PEG(P-74)		1		16,000
	4. QF-1(Q-6)		1		16,500
	5. NGS(N-4)		1		15,000
	6. XE-60(X-1)		1		14,500
	7. DC-11(S-61)		1		15,500
	8. 吸着剤モレキュラーシープ5A(M-1)		1		4,500
	9. 記録紙		50	950	47,500

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
	10. ステンレスカラム (3mm×2m)		6	4,850	26,100
5	光合成測定装置 Model : ASSA-2 標準 Gass (CO ₂) ボンベ 10 ℓ 記録紙 (10 Roel 入)	堀場	1 2		61,500 40,000
6	酸度測定器 Model : HM-5 B 複合電極 GST-155C Model : HM-7 B 硝子電極 HGS-2005 比較電極 HS-205C Model : HM-10 B 電極 (Digital) GST-155C Model : HM-15 A 電極 (Digital) GST-155C	東亜 " " "	4 2 2 2 2	22,000 7,000 6,000 22,000 22,000	88,000 14,000 12,000 44,000 44,000
7	島津分光光度計 Model : UV-140-02 用 記録計 α-135 石英セル 10mm (200-34442) Model : UV-210 用 記録紙 (200-91512) タンクステンランプ (200-39053) 重水素ランプ D-300H	島津	1 5 50 5 3		330,000 65,000 40,000 5,000 60,000
8	三眼顕微鏡 Projection Screen (BH-MPS-W) Photographic Eye piece FK 2.5× FK 5× FK 6.7×	オリンパス	1台 1 1 1		78,000 7,000 7,000 7,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
9	生物顕微鏡 Model : LUR-Ke 対物レンズ CF Plan APO 60 X	ニコン	1		200,000
	接眼レンズ CFW 15X (2本)		セット 1		26,000
	CF Photo 10 X		1		14,000
10	Amino 酸分析計 Model : KLA-5 10 N 交換樹脂 (No2612) 10 g 入	日立	5	57,000	285,000
	〃 〃 (No2611) 10 g 入		5	57,000	285,000
11	蒸溜水製造装置 Model : B-10 型 イオン交換樹脂 B-10Y 用	ヤマト	3	22,000	66,000
	原水フィルター SWPPO10-1		3	2,200	6,600
12	高速冷却遠心分離器 Model : 18R-3 Tubess (50 ml 用)	日立	5	13,000	65,000
	土壌脱水 Tube		5	14,000	70,000
13	冷却小型遠心器 Model : H-103R 遠心管立 (50 ml 用二穴)	三田村	4	9,500	38,000
	ガラス管 (GT-11)		20	1,100	22,000
	〃 (GT-13)		80	110	8,800
14	実体顕微鏡 Model : X-TR 接眼レンズ (写真用) P ₇ X	オリンパス	1		4,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
14	接眼レンズ(写真用) P ₁₅ X		1		4,000
	万能照明装置 LSD		1		40,000
	TE-II トランス付 同上用スペアランプ TB-1 (6V, 5A)		3	400	1,200
15	コンペアー Model : AAM-7用(上下)	三田村	10組	4,400	44,000
16	Slide Processor用フィルム	いわき通商	20	25,000	500,000
17	恒温水槽 Model : BT-25	ヤマト科学			
	温度調節器		5	20,000	100,000
18	冷凍乾燥器 Model : DC-35	"			
	ナス型 フラスコ 200 ml		10	3,300	33,000
19	塩濃度測定機 Model : CM-6A	東亜			
	電極, CG-201PL		2	44,000	88,000
20	顕微鏡写真機	オリンパス			
	接眼マイクロメーター OCM24% 10/100		1		4,000
21	直続式Gas検知器 Model : G ガスチェック				
	Gas検知管				
	亜硫酸ガス(低, 中, 高濃度)		30	2,200	66,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
21	硫化水素(低, 高濃度) 各10		20	2,200	44,000
	一酸化炭素(低, 高濃度, 室内用) 各10		30	2,200	66,000
	炭酸Gas(低, 高濃度) 各10		20	2,200	44,000
	Ammonia(低, 中, 高濃度) 各10		30	2,200	66,000
	塩素(低濃度)		10	2,200	22,000
	二酸化窒素 "		10	2,200	22,000
	窒素酸化物 "		10	2,200	22,000
22	無菌類 Model: GCV オプション部品 排気Fan, ジャバダクト 固定Belt, フランジ M4 Nut, M4 Spring ワッシャー M4 平ワッシャー	日立	セット 1		48,500
23	Gas chromatograph Model: GC-6A	島津			
	1.0 AD540J		3	3,600	10,800
	1.0 AD741KN		3	2,200	6,600
	1.0 42J		1		15,000
24	走査顕微鏡 Model: JSM-P15 光電子増倍管	日本電子	1		100,000
25	Draft chamber Model: 11-10-24 Pumping Motor	三田村	1		154,000
26	農業気象総合記録装置 Model: 1702A	飯尾電機			

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
26	温ユニット コード30 m付	(TS-Th)	3	118,000	354,000
	露点温度ユニット //	(TS-DW) 1	1		340,000
	示差放射ユニット //	(TS-CN) -11	1		800,000
	地中熱流量ユニット //	(TS-CN) -81	1		200,000
	微風向, 風速ユニット //	(TS-AS) -AM	1		1,120,000
	風向風速計用ユベンレコーダー	(EL-622) -A	1		700,000
	記録計(標準型)	(EL-76) -12	1		455,000
27	島津分光光度計	島津			
	Model : UV-140-02				
	Micro-cell		3	24,000	72,000
	Sample-cell (4 cell Holder)		3	4,000	12,000
	Lamp (タングステン)		5	1,000	5,000
Recorder (u-135)		1		380,000	
28	Grain Testing Mill	いわき通商			
	Model : TM-05				
	Abrasive Roller		2	28,500	57,000
Ports No TM-11 KEY #49					
29	Spectrophoto Meters	日立			
	Model : 100-10 glass cell		5	33,000	165,000
30	自動葉面積計	三田村			
	Model : AAM-7用				
	Belt conkeyer		20	4,400	88,000
	光源用ランプ		7	3,500	24,500
パルス用ランプ		7	300	2,100	
31	直示天秤	島津			
	Model : LS-6DT				

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
	Lamp (6V, 1A)		5	600	3,000
32	電動打字機 IBMタイプライター-コレメント (72,015,070,067,087,001, 007,012,030,059,004,069, 074,004,020,057,090)各1 コレクタブルフィルム リボン リフト オフテープ(修正用)	岩本商事	1式		
			10	1,300	13,000
			10	1,100	11,000
33	種子精送器 円筒型硝子管 (稔実測定用)	三田村	2	4,400	8,800
34	光電日度計 Model: C-1, C-1-Lamp	木屋	3	2,000	6,000
35	電気自動乾燥滅菌器 Model: 460 温度調節器	池田理化	1		13,000
36	電動打字機 Model: 92C-18 Ribbon リフトオフテープ	岩本商事	10	1,300	13,000
			5	1,100	5,500
37	IATRON Model: TH-10 Air Pump (NS-1) chromarod (S-II) 20本入	三田村	1		5,500
			1		35,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
38	土壤粒団分析装置 №308-B	木屋	1		13,000
39	土壤ふるい №308-C(S-200)	〃	1		37,500
40	回転濃縮器 (ロータリーエバポレーター)用部品	ヤマト科学			
	冷却器		2	38,500	78,000
	ナス型フラスコ 1000 ml		2	7,000	14,000
	丸底フラスコ 1000 ml		2	5,000	10,000
	ウォーターバス, BM-41		1		15,500
	サポート ジャッキ SJ-20		1		8,000
	ハンディアスピレーター-WP-33 (100V, 60Hz, 1φ)		1		96,000
41	自記温湿度用チャート MB-1, 7日用 -15+40°C, 0~100% 55枚入	木屋	2	2,200	4,400
42	赤外線水分計用電球 №, 1901-A, Lamp	〃	3	3,000	9,000
43	カメラ Model: F2	ニコン			
	ズームレンズ 80~200mm		1		108,000
	広角レンズ 28mm F3.5		1		34,000
	50mm 標準レンズ F1.8		1		25,000
	スピードライト SB-10		1		20,000
	ビューファインダー DP-11		1		38,000
	三脚, マスター-EV 3投		1		23,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
44	三眼顕微鏡 Model : BHB-413用	オリンパス			
	対物マイクロメーター		2	5,000	10,000
	接眼 〃		2	4,000	8,000
45	電子複写機用トナー Model : PT-510用	岩本商事	10	4,800	48,000
46	精米機 Model : SB-2Bb				
	ローラ KEY 〃 293		2	9,000	18,000
	〃 294		2	9,000	18,000
47	群落相対照度計用 Tripod Model : NS-2用	三田村	1		11,000
48	自動車用パーツ Model : TOYOTA MS-88V-VR	トヨタ			
	Oil Filter 15601-44011		20	5,000	100,000
	〃 15600-41010		20	5,000	100,000
	air Element		5	7,000	35,000
49	農業気象総合測定装置 Model : AMR-170 2B	飯尾電機			
	地中熱流量検出器	(TS-CN) (-81)	2	200,000	400,000
	示差放射検出器	(TS-CN) (-11)	1		800,000
	微風向、風速ユニット	(TS-AS) (-AM)	1		1,120,000
	土壌水分ユニット	(TS-PE)	1		240,000
	記録紙 E-75-100		50	1,700	85,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
50	Portable PH Meter 用 Model : HM-1F 用 電極 GS-2C	東 亜 電 波	1		13,000
51	葉面積測定機 Model : AAM-7 光源用ランプ パルス用ランプ	三 田 村	5	3,600	18,000
			5	200	1,000
52	Profile Projecter 用 Model : 6C-2 光源 Lamp (24V, 150Wパゲン)	ニ コ ン	8	3,500	28,000
53	Microtome 用 No 5006 刀, 柄付 15 cm	木 屋	1		20,000
54	天秤用ランプ Model : LU-T3000 L-2用, Lamp, 6V, 1A	島 津	20	550	11,000
55	電動打字機用 Model : 92C-181 Type - Ribbom リフトオフテープ(修正用)	岩 本 商 事	5	1,400	7,000
			4	1,000	4,000
56	PH Meter 用 Model : HM-7B 電極 (GST-155C)	東 亜	2	22,000	44,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
57	冷凍乾燥器用 Model : DC-35 ナス型フラスコ 300 ml 径 29/42	ヤマト	10	3,500	35,000
58	塩濃度測定機用 Model : CM-6A 電極 (G-201 PL)	東亜	1		44,000
59	土壌水分計用 Model : T-6 100 V 定圧装置 PC-5 型 吸引分岐管	池田	1		200,000
			4	45,000	180,000
60	麦類 4条播種機用 Model : PR-4M 大豆用アタッチ部品 大豆用導管固定座 大豆用導管固定座取付座 大豆用接地輪 大豆用ロール 施肥装置 PTO軸関係部品	いわき通商	2組	14,000	28,000
			1		33,000
			1		10,000
61	坪刈用刃摺機用 φ185 Roller 2ヶ1組	木屋	1		21,000
62	試験用刃摺機用 Model : THV-35A ローラ KEY φ38	いわき通商	4	9,500	38,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
68	調節温室用保守機器	小糸工業			
1)	Parts for oil Burner		Lots 2	362,000	724,000
	Burner moter				
	Oil pump				
	Ignition transformor				
	Selenoid nlue				
	Protect relay				
	Cadmium cell				
	Ignition rad				
	Nezzle tip				
	Coupling joint				
	Autiliary relay				
	Pilot lamp				
	Presusce gauge				
2)	Parts for Hot Water Pump Gland	"	Lot 1		88,000
	Packing				
	Coupling rubber				
	Bearing black of pump				
	Bearing block motor				
3)	filter for Fan convector 690 × 215 × 10 t	"	Pcs 12	6,600	79,200
4)	Moter for Fan Convector	"	Sets 6	55,000	330,000
5)	Motor for temperature Detector	"	Pcs 6	23,000	138,000
6)	Relay for temperature Controller	"	Pcs 24	1,900	45,600
7)	Parts for temperature Recorder	"	Lot 1		327,000
	Printer assembly				
	Printer driving cable				
	Switching oil				
8)	Recording Chart		Pcs 50	3,500	175,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
9)	temperature Controller Range : - 10 to 40 °C Control action : P and I	小糸工業	sets 2	115,000	230,000
10)	Relay for Control panel (SR-40)	"	Pcs 5	5,300	26,500
11)	Relay for Control panel (SR-80)	"	" 5	7,800	39,000
12)	Spare parts for Recorder amplifier card 1 Pc Range card 1 Pc	"	Lots 2	170,000	340,000
13)	Modutrol motor (M944B) and Auto transformer (AT-72JI)	"	Set 1		150,000
14)	Magnetic switch MOS-A 10 3 Pcs MOS-A 20 1 Pc MOS-A 35 1 Pc	小糸工業	Lot 1		61,500
15)	Oil Pump Standard gear type 20 ϕ \times 30 LPM \times 30 mH Motor : 0.4 Kw (3 ϕ , 220 V , 60 Hz)	"	Set 1		140,000
16)	Dryer Element for Chiller	"	Pcs 4	15,000	60,000
17)	Spare parts for Refrigerator	"	Lots 2	30,000	60,000
18)	Hot Water Pump Single suction velute pump 125 ϕ \times 1,850 LPM \times 30mH	"	Set 1		931,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
	Motor : 15 Kw (3 φ , 220 V , 60 Hz)				
64	世代促進温室部品	小糸工業			
	1) 測温抵抗体 (RESISTANT BULB) SR-R-100 Pt 100 Ω at 0 °C		1台		100,000
	2) 空気抜き弁 (AIR VENT VALVE) A-10 呼び径 20A		1ヶ		17,400
	3) 蛍光灯 (VITALUX) FL40SBR-A-40W		50本	1,760	88,000
65	図 書	いわき書店			
	1) 環境保全と窒素リン		1		5,900
	2) 環境と植物の生長制御		1		2,900
	3) 形態形成		1		2,200
	4) 植物遺伝学(II)核酸と生合成		1		9,000
	5) 土地経済論		1		4,800
	6) 重金属測定法		1		4,200
	7) 自然保護ハンドブック		1		5,800
	8) 遺伝学辞典		1		6,400
	9) 園芸経営技術の実践		1		3,900
	10) 実用農業英語小辞典		1		1,800
	11) 植物育種学		1		4,200
	12) 食料自給力の技術的展望		1		2,400
	13) 食糧の国際開発		1		4,200
	14) 施設園芸経営発展論		1		3,300
	15) シダの孢子 — 誕生から成熟 —		1		15,600
	16) 生体膜と細胞活動		1		2,300
	17) 生物学資料集		1		2,400
	18) 生物による太陽エネルギー変換		1		3,000
	19) 植物遺伝学(III)		1		9,000
	20) 分子遺伝学		1		4,600
	21) 分子細胞生物学入門		1		3,600

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
22)	免疫学入門		1		5,800
23)	英和免疫学辞典		1		8,200
24)	動物遺伝学		1		5,100
25)	ダ ン 類		1		11,400
26)	農業施設		1		4,200
27)	農業気象学		1		3,500
28)	農業経済調査論		1		3,400
29)	英和、和英農林水産用語辞典		1		6,000
30)	耐久性細胞		1		6,000
31)	基礎遺伝学		1		2,700
32)	近代農業経営学の理論と応用		1		5,400
33)	近代農業経済学		1		5,400
34)	科学研究の計画と進め方		1		2,700
35)	昆虫超微形態学		1		16,800
36)	昆虫の表面構造		1		8,200
37)	行動から見た昆虫(2)		1		3,300
38)	昆虫の光周性		1		4,800
39)	高度経済成長と農業問題		1		3,400
40)	草地の生態と生産技術		1		2,300
41)	作物の形態成論		1		7,200
42)	作物の連作障害		1		2,700
43)	栽培のための作物生理		1		1,800
44)	作物の発育生理		1		3,500
45)	野菜畑作技術事典Ⅵ		1		10,800
46)	日本の大豆		1		3,900
47)	熱帯の有用作物		1		5,400
48)	種苗の生理と育苗技術		1		1,500
49)	食用作物学		1		4,200
50)	マメ類、イモ類、レンコン類		1		9,600
51)	米の未来学		1		2,800
52)	近世稲作技術史		1		6,000
53)	応用統計ハンドブック		1		9,400
54)	昆虫の科学		1		3,200
55)	昆虫の病理学		1		4,100
56)	昆虫行動の化学		1		3,000
57)	落葉果樹の病害虫		1		2,200
58)	選択毒性		1		3,900

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
59)	続選択毒性		1		4,600
60)	植物病理学		1		3,600
61)	ハエー生態と防除		1		7,800
62)	ペトロジ—土壌学の基礎—		1		5,400
63)	土壌有機物		1		4,200
64)	土壌肥沃度論		1		2,400
65)	土壌と水		1		2,200
66)	有機物施用と理論と応用		1		1,900
67)	英中日土壌学用語集		1		10,200
68)	野外研究と土壌図作成の～		1		6,000
69)	シェファー土壌学		1		10,200
70)	水田の脱室現象		1		2,100
71)	肥沃度測定のための土壌分析		1		4,600
72)	薬用植物学各論		1		4,000
73)	薬用植物分類学		1		5,400
74)	広川薬用植物大事典		1		4,800
75)	園芸学研究集録 Ⅱ 9		1		4,600
76)	園芸植物の開花生理と栽培		1		3,400
77)	野菜の栄養生理と土壌		1		2,700
78)	野菜の栄養生理と施肥技術		1		3,400
79)	施設園芸の環境と栽培		1		5,800
80)	原色施設野菜の生理障害		1		3,000
81)	実験活用菜蔬園芸HB		1		4,700
82)	原色東洋ラン		1		33,600
83)	実験農芸化学 (上)		1		5,400
84)	〃 (下)		1		5,800
85)	核酸の化学		1		2,300
86)	ホワイト生化学		1		6,400
87)	〃		1		7,800
88)	核酸有機化学		1		3,900
89)	現代微生物学		1		5,800
90)	酵母における適応と制御		1		4,600
91)	澱粉科学ハンドブック		1		10,700
92)	澱粉科学実験法		1		7,500
93)	栄養学事典		1		5,800
94)	有機化合物のマススペクトル		1		8,400
95)	有機化学物確認法 I		1		6,000

番号	品名及び仕様	メーカー名	数量	単価	金額
96)	有機化合物確認法 II		1		6,600
97)	〃 III		1		7,800
98)	〃 IV		1		6,600
99)	好塩微生物		1		5,400
100)	食品冷凍工学		1		4,200
101)	生物の制御機構		1		2,800
102)	生物活性天然物質		1		8,400
103)	新生物化学 (上)		1		3,100
104)	〃 (下)		1		3,400
105)	生物物理化学実験 (I)		1		3,900
106)	〃 (II)		1		3,900
107)	食品微生物学		1		11,500
108)	微生物の分類と同定		1		5,800
109)	微生物の生態(2,3,4,7,8)各1		1		22,500
110)	微生物利用学概論		1		4,200
111)	微生物の保存法		1		6,000
112)	微生物と植物生育		1		4,600
113)	農学における生物化学		1		7,200
114)	果汁, 果実飲料事典		1		9,400
115)	菌類の系統進化		1		3,900
116)	食品学栄養学を主とした生物化学		1		3,000
117)	水性二層分配法		1		3,600
118)	酸素添加酵素		1		4,300
119)	基礎生物化学		1		3,200
120)	生物化学		1		4,200
121)	環境変異原実験法		1		6,500
122)	遺伝子操作実験法		1		3,600
123)	クロマトシ		1		3,000
124)	分子育種と応用微生物		1		3,000
125)	ビタミン学 (I)		1		7,500
126)	植物色素		1		8,100
				総合計	22,860,000

(5) 専門家携行機材

56年度専門家の携行機材は表7のようである。

表から明らかなように小松専門家以外の携行機材は当該専門家の帰国後になって到着した。

表-7 専門家携行機材

区 分	到 着 日	機 材 名 お よ び 数 量
小 松 良 行	81. 5. 20	Green Meter 1個
柿 本 彰	81. 12. 16	Rotary Vacuum Evaporaton 1個
柴 田 和 博	〃	Thermometer 1個
小 沢 行 雄	〃	Tensionmeter 2個 Type Ribbon 2 Box Roll Paper 2 Box
平 尾 重 太 郎	〃	Injector 5個 Needle 1 Set Hand Duster (7ℓ) 2個

注) 平尾専門家の携行機材として申請した Arnold Hand mycroplicater 1個および Biolight Battery 4個が削除された。

2 昭和57年度事業計画について

本プロジェクトは82年3月31日をもって終了し、そのための総括シンポジウム(総合評価会)を韓国側の提案により、3月末~4月上旬に、日本側専門家代表の参加の下に、韓国水原市の農村振興庁において開催が予定されている。

当プロジェクトに引続き「農業気象災害の対策に関するプロジェクト共同研究、畜産振興技術についての個別共同研究」の開始を韓国側は強く要望しており、日本側からこのための事前調査団が8月派遣され、調査と打合せを行った。

現プロジェクト研究に引続き、韓国農業研究協力事業の開設が期待されている。

3 昭和56年度実績に対する評価等

1) 現 follow up 期間の研究協力の自己評価および韓国側の評価振りについては、55年度報告で述べた通りである。

2) follow up 期間の最大の出来事は80年の大冷害であり、この経験と教訓により、これまでの韓国稲作が大きい転機を迎えたことである。長期滞在中の団長は、80年冷害についての技術的記録を成書として残すべきであると提言した。

農村振興庁はこの提言を採用し、金東秀試験局長が主査となり、全国の関係各機関技術者の協力により、「水稲冷害実態分析および総合技術対策」（農村振興庁発行、227頁、1981年7月15日）が発刊された。

また、振興庁へ報告するための基礎調査資料を基として、各道の農村振興院ではそれぞれ各道についての80年冷害の原因、被害状態、技術対策等の記録を作成した。例えば成書として発行されたものに近畿道の「水稲冷害実態と技術対策」（近畿道農村振興院発行、267頁、1981年12月20日）がある。

これらは日韓農業共同研究の成果の一つといえよう。こうした実際に発生した冷害を調査し、取りまとめる過程において、韓国技術者は水稲冷害に対する認識を新にし、対策技術知識の提高と問題点の所在を明確にすることができた。そしてこのことは直ちに81年の稲作指導に活用されたし、研究を要する事項も整理され次期設定を要請中の気象災害対策技術についての新プロジェクトの中に強調することとなった。

- 3) 韓国においては80年冷害の経験から稲作についての研究指導の方向に大きい転換のあったことは、55年度報告で触れたのでここでは省略するが、韓国稲作が安定多収を指向している中で当研究協力においてもこれに対応して、56年度の専門家派遣を耐冷性育種・耐冷機械移植栽培法およびウンカ類の発生予察にしばったことは韓国側に喜ばれた。
- 4) 昭和56年度は当プロジェクトの最終年次である。団長は予めこのfollow up期間が予定通り終了するよう、予め種々検討し、計画的に研究を推進して来た。

例えば前項専門家派遣分野の精選、各専門分野別の部長級専門家による総括などを行ったため、現プロジェクトは予定通り82年3月31日に終了出来る見通しである。またこのことについては韓国側も了承していると同時にこれまでの日本側の協力を多としている。

なお、本年度の部長級専門家は水稲育種・生産力と施設園芸分野であったが、別掲の専門家報告に見られるように、それぞれこの分野の総括がされ、今後の自力による研究推進についての自信を深めると共に、深い感銘を与えた。

- 5) 韓国側にはfollow up期間の予算、専門家派遣、研修員受入れ、供与資機材等が協定期間に比べ格段に低下したことに不満の大きいことは前年にも報告したところであるが56年度の供与資機材や携行機材の到着が遅れたことなどについても、本年が最終年であること、次の新プロジェクトに掛ける期待の大きいこともあって56年度に特に不満表明など表面化することなく終了する予定である。

ただし、日本専門家派遣期間が前年度まで1ヶ月主体であったものを2ヶ月に修正され研力協力の実があかったことは評価された。

- 6) 1974年から始まった当プロジェクト共同研究に関係した日韓両国代表者による「総括シンポジウム」（日韓共同評価会）の開催を韓国側が提案し、日本側の賛成も得られ、

実現の見通しとなったことは誠に喜ばしい。このシンポジウムが当プロジェクト研究の成果の公正な評価と反省ならびに今後の日韓両国の共同研究発展の資となることを期待している。

7) かねて要請中であつた現プロジェクトに続く新プロジェクトについての事前調査団が56年8月に来韓した。

韓国側では全国の関係試験研究機関の総力をあげて、各種対象作物の主要気象災害別の研究事項、その推進計画等、かなりの日時と努力を使って調査団への対応を準備した。在韓日本側研究団もこの準備に協力した。

しかし、事前調査団の持参した日本側の意向が「水稻冷害」に限定された案であつたため、韓国側は大きい不満を表明し、遂に調査団は合意に達せないまま帰国した。

韓国側で予定している第5次農業発展計画（'82～'86）、それを達成するための試験研究推進方案等に理解を示し、日本側の立場のみで「水稻の冷害」と限定することなく、対象とする災害と作目の種類を拡大し、韓国の災害対策研究の全般的底上げと農業生産の農業生産の安定化に協力されることが望ましい。

4 (なし)

5 (リーダ会議資料に記述)

<付記> 本報告はリーダーの個人的意見である。

業 務 情 況 報 告 書

(1 9 8 1 年 4 月 分)

韓国農業研究協力

坪 井 八 十 二

I プロジェクト運営概況

1 一 般 概 況

1) 日本専門家

増田専門家は予定通り任務を終え4月14日帰国した。

2) 韓国研修員

麦類生理生態分野の徐亨 研修員(農業技術研究所)は1年コースの研修を終え予定通り4月30日帰国した。

3) 供 与 機 材

80年度追加供与機材として農業気象総合記録装置および部品等7種(B/L No. YI-048)を4月30日通関検収した。

4) 専門家携行機材

該当なし

5) 資 料

4月中に受理した資料は次の通りである。

- ① 農林水産省広報 '81.1, 2, 3月号 各1部
- ② News letter '81.3, 4月号 各1部
- ③ 世界の農林水産 '81.3月号 1部
- ④ 海外事務所の手引 56年1月-経理編- 1部
- ⑤ 専門家通信 1部
- ⑥ 国際協力課だより56年4月 1部
- ⑦ 新プロジェクト方式技術協力の概要 1部

(以上4月28日受理)

2 研 究 状 況

Follow up project 81年度計画打合せのため清田団長以下5名の日本側打合せチームが来韓(4月6日~17日)関係試験研究機関の調査をすると共に本 Project 第3次合同委員会(4月14日)に出席協議した。

3 日本専門家の活動状況

- 1) 増田専門家は麦類研究所に駐在し、麦類の育種、栽培品質に関する試験計画ならびに、これまでの試験研究結果に対する検討を行い、試験研究全般に亘って協議した。

なお、全場セミナーを3回実施した。

- ① 日本における麦作および麦試験研究の動向
- ② 日本における麦作および麦試験研究の現状と問題点
- ③ 韓国における麦試験研究の現状をみた所感

また、嶺南、湖南作試に出張し、麦類の育種について協議

- 2) 団長は日本農業気象学会に出席（4月1日～4月4日）して“韓国の1980年冷害と今後の対策研究の方向”という題目で研究発表をした。

4 任国側の協力体制

別に変化はない。

5 機資材の状況

異常はない。

備 考

1) 経 済 開 発

- 油類、石炭、電気料引上

韓国政府は4月19日0時を期して、石油類と石炭、電気料金等エネルギー値段を一斉に引上調整した。

ガソリンは普通品がℓ当680ウオンから700ウオンに電気料は1Kw家庭用77ウオン、産業用55ウオン（4月22日）

- 農村人口が年と共に減少

80年農漁業センサス

70年代に入り全人口は継続して増加しているのに、産業構造の高度化に伴って、農現象が継続しており、農漁村の人口は大きく減少した。4月22日農水産部が発表した80農漁村センサス結果に依れば、昨年末現在の全国農家人口は1千83万5百85名で70年末に比べて24.9%が減っており、農家戸数も2百15万5千15戸で13.2%の減少をみせている。

農漁業センサスは10年を週期として全体を対象に調査するもので漁業人口も74万5千9百8名で70年末より18.3%、漁業家口数は13万8千13で7.4%がそれぞれ減少している。

業 務 情 況 報 告 書

(8 1 年 5 月 分)

韓国農業研究協力

坪 井 八 十 二

1 プロジェクト概況

1 一 般 概 況

1) 日本専門家

小松専門家は予定通り5月20日着任した。

2) 韓国研修員

本月は該当なし。

3) 供与機材

該当なし。

4) 専門家携行機材

小松専門家の携行機材葉緑素計1個を同専門家の駐在する作物試験場に引渡した。

5) 資 料

該当なし。

2. 研 究 状 況

1) 研究会、協議会等

○麦類現地中間評価会(5月25日～27日)

○冬作物中間評価会(5月20日～6月5日)

3. 日本専門家の活動状況

1) 団長は韓国農村経済研究院の講演依頼を承諾し5月1日同院において“気象災害と農業技術と農家経営”という演題で講演をした。

2) 団長は園芸試験場の希望で果樹凍害調査のため京畿道楊平郡に二回に亘って現地に出張した。(4月29日, 5月19日)

3) 団長は尹勤煥振興庁長の母親の喪式に参席した。(5月10日)

4) 小松専門家は着任して、関係機関への挨拶を終へ、作試の水稲栽培科で試験設計案の協議と被覆材利用による育苗試験の細部打合せを行い浸種にとりかかり、被覆材利用による育苗試験の播種を終えた。

4. 任国側の協力体制

別に変化はない。

5. 機資材の状況

- 1) 研究団用の複写機は損傷部品の交換により正常に機能を発揮するようになった。御高配を感謝する。
- 2) 飯尾電気の折井社長、白井部長が来韓（5月8日～5月15日）して80年度振興機材農業気象総合記録装置（2 Set）（作試、湖南作試）の設置指導と既に導入され、園試本場と釜山支場に設置している同記録装置他同社製品の点検をした。

備 考

○全国田植状況

一部地方の早魃にもかかわらず田植は順調に進んで6月6日現在全作付対象面積1百22万町歩の中、68%である825.9百町歩が田植を終え昨年比べて一週間以上田植をしている。農水産部によれば最も早く進んでいるところが江原道で6月6日現在99%の実績をみせている。

その次が京畿道の98%、忠北道が82%の実績をみせている。

このように田植が早くなっているのは農民達が昨年の冷害の経験を生かして政府の早植指導に積極的に呼応しているためである。農水産部は南部地方の早魃にもかかわらず全国のダム、貯水池、普通農業用水の平均貯水量が80%であるので大した支障はないものとみている。

しかし、全国的な早魃のため、揚水機灌漑水等早害対策施設設備を徹底的整備するよう各市道に指示している。

全国1百22万町歩の水田は1毛作が87万7千町歩、2毛作が34万3千町歩でこの中93万2千町歩は当分間降雨がなくても用水供給が可能で残りの28万8千町歩が早害が憂慮される。

早害危険地域でも14万6千町歩は揚水機および管井等簡易水源によって対処が可能とみられる。

前年同期の田植実績は全国が64%であった。

業 務 情 況 報 告 書
(8 1 年 6 月 分)

韓国農業研究協力

坪 井 八 十 二

1 プロジェクト概況

1. 一 般 概 況

1) 日本専門家

本月は団長と小松専門家のみである。

2) 韓国研修員

李康萬研修員は北海道農試における1年間の研修を終え6月14日帰国した。

3) 供与機材

Cemical applicator for Rice planter Attachmeca YANMAR Model AM-20

4 Set (B/L No. KI-8. を 6 月 2 9 日 通 関 し 作 試 に 引 渡 し た 。

4) 専門家携行機材

増田専門家の携行機材顕微鏡 lamp 他3点を6月23日通関受領した。

5) 資 料

6月中に受理した資料は下記のとおりである。

- | | | |
|--------------------|-----|------------------|
| ① 国際協力 Mag 1981 | 1部 | (6 月 3 日) |
| ② 農林水産広報 4月号 | 1部 | (6 月 1 6 日) |
| ③ 国際農林業協力情報 2, 3月号 | 各1部 | (〃) |
| ④ 世界の農林水産 4, 5月号 | 各1部 | |
| | 6月号 | 2部 (6 月 1 6 日) |

2. 研 究 状 況

1) 研究会, 協議会等

本月はとり上げるものはない。

3. 日本専門家の活動状況

1) 団長は6月16日, 全北道農村振興院で「気象災害対策研究 推進小考」という演題

で講演をした。なお17日雲峰冷害試験地における棟上式に参席し職員を激励した。

2) 小松専門家は6月8日~11日間の湖南地方へ出張し, 湖南作試および忠南, 全南両

農村振興院の3ヶ所において中苗育苗に関するセミナーを実施した。

4. 任国側の協力体制

別に変化はない。

5. 機資材の状況

別に問題はない。正常に活用されている。

備 考

○全大統領亜細亜5国巡訪日程

全斗煥大統領夫妻は25日午前11時大統領特別機便で金浦空港を出発「インドネシア」「マレーシア」「シンガポール」「泰国」「フィリッピン」等亜細亜5個国訪問のため出国した。(6月25日)

業 務 情 況 報 告 書

(8 1 年 7 月 分)

韓国農業研究協力

坪 井 八 十 二

I プロジェクト概況

1. 一 般 概 況

1) 日本専門家

小松専門家は予定通り7月16日帰国した。7月17日に柴田専門家、7月27日に小沢専門家がそれぞれ着任した。

2) 韓国研修員

厳基白研修員(九州農試)は7月9日、高在哲研修員(農事試験場)は7月16日に出国した。

3) 供与機材

本月は該当なし。

4) 専門家携行機材

Silver Sheet(育苗用ポリエチレン)を7月15日通関して作試栽培科に引渡した。

5) 資 料

7月中に受理した資料は次のとおりである。

① 国際協力 81.6 1部 (7月7日)

2. 研 究 状 況

1) 種薯生産供給体系改善協議会 (7月16日)

2) 秋馬 薯地方連絡試験設計協議会 (7月15～16日)

3. 日本専門家の活動状況

1) 団長は近畿道農村振興院の講演依頼があったので7月7日同院において“気象災害対策研究の推進小考”という演題で講演をした。

2) 団長は7月22日作試珍富出張所の開所式に参席のため柴田専門家と出張した。

3) 小松専門家は7月2日慶北道農村振興院と7月10日作試本場で「日本における水稻大規模育苗の実態」についてセミナーを実施し、滞在期間中意欲的に研究協力の任を終え7月16日帰国した。

4) 小澤専門家は7月31日園芸試験場と農業技術研究所でセミナーを実施した。

「園芸気象災害研究の進め方」「農業気象研究の進め方」

4. 任国側の協力体制

別に変化はない。

5. 機資材の状況

別に異常はない。

業 務 情 況 報 告 書

(8 1 年 8 月 分)

韓国農業研究協力

坪 井 八 十 二

I プロジェクト概況

1. 一 般 概 況

1) 日本専門家

平尾専門家は8月4日、柿本専門家は8月7日にそれぞれ着任した。また、小沢専門家は8月17日、柿本専門家は8月20日にそれぞれ帰国した。

2) 韓国研修員

本月は該当なし。

3) 供 与 機 材

該当なし。

4) 専門家携行機材

該当なし。

5) 資 料

8月中に受理した資料は次の通りである。

- ① 農林水産省広報 5, 6月号 各1部
- ② 世界の農林水産 7, 8月号 各1部
- ③ 専門家通信 Vol. 2, №1 3部
" Vol. 2, №5 2部
- ④ 派遣専門家の手引 56年6月 1部 (以上8月4日受理)
- ⑤ 国際農林業協力 Vol. 4 №1 1部
- ⑥ 国際農林業協力事業 8/5 Vol 4 №2
" 8/6 Vol 4 №3
" 8/7 Vol 4 №4 各1部
- ⑦ News Letter 81/5, 81/6, 81/7 各1部
- ⑧ 国際協力課だより 第1巻第2号, 第3号 各1部

2. 研 究 状 況

1) 研究会, 協議会

○水稲病虫害管理国際セミナー

(参加国)韓国, 日本, 自由中国, フィリッピン

7月28日～8月1日

○大型共同研究中間検討会(蚕業, 畜産)

8月7日

○'80.'81冬作物(園芸)評価会

8月14日

- 2) 韓日農業共同研究所プロジェクト事前調査団来韓
第1, 2, 3次協議会

3. 日本専門家の活動状況

- 1) 小沢部長は農業技術研究所で農耕地の熱収支に対してセミナーを実施した。
(8月12日)
- 2) 柴田専門家は湖南作試で「耐冷性育種と耐冷性検定における2, 3の問題」についてセミナーを実施した。
- 3) 柿本, 柴田両専門家は, 湖南作試, 嶺南作試, 同益徳出張所, 等を巡回しながら巡回しながら地域の試験研究事業の実態を視察し, 意見交換を行った。
- 4) 団長は新プロジェクト事前調査団の調査目的達成のため各試験研究機関ならびに一線道振興院や新設された僻地の冷害試験地等へ調査団一行と同途した。
- 5) 平尾専門家は8月中次の題目でセミナーを行った。
“日本における水稲害虫の発生動向と防除の現況”
於 農業技術研究所(8月14日)
“日本におけるイネウイルス病の発生動向と新ウイルス病の概観”
(全北道農村振興院の職員も出席)
於 金羅南道農村振興院(8月29日)

4. 任国側の協力体制

変化はない。

5. 機資材の状況

別に異常はない。正常に活用されている。

業 務 情 況 報 告 書

(8 1 年 9 月 分)

韓国農業研究協力

坪 井 八 十 二

I プロジェクト概況

1. 一 般 概 況

1) 日本専門家

柴田専門家は9月16日帰国、本年度の最終専門家平尾室長一人のみ在韓中である。

2) 韓国研修員

高級視察研修員として、嶺南作試朴夾敬場長が9月18日出国10月3日帰国予定である。

3) 供 与 機 材

該当なし。

4) 専門家携行機材

該当なし。

5) 資 料

9月中に受理した資料は次の通りである。

- ① 国際協力 81/8月号 1部 (9月10日)
- ② 国際協力 81/9月号 1部 (9月22日)
- ③ 農業気象 Vol 37, No. 2 81, 9月号 1部 ()

2. 研 究 状 況

1) 研究会, 協議会

- 水稻優良品種選抜および気象災害軽減研究現地検討会 (9月3日～9月7日)
- 水稻現地検討会 (9月5日～9月9日)
- 大型共同研究課題中間評価会 (9月8日～9月9日)
- 柴田専門家帰国報告書 (9月14日)
- '81 農事試験研究事業中間評価会 (9月5日～16日)
- 第23次中央農業産学協同審議会 (9月18日～19日)
- 家畜衛生国際セミナー (9月22日～26日)
- 農業研究管理セミナー

(参加国)韓国33名, インドネシア1名, フィリピン6名, スリランカ2名, 泰
国2名

○平尾専門家帰国報告会 (9月29日)

3. 日本専門家活動状況

1) 柴田専門家は9月に入って韓国北部東海岸側の稲作状況の視察のため作試珍富出張所・連谷試験地に出張した。また, 水稻の耐冷性形質相互間および他の実用形質との関連を明らかにして耐冷性育種上の参考知見を得るため春川耐冷性試験地に出張し, 必要形質の調査を継続した。

2) 平尾専門家は9月初旬, 湖南作試, 全羅南道及び慶尚南道の農村振興院に出張し, 調査を行うと共に病害虫の発生状況を視察し, 水稻害虫の発生予察および防除について関係者と討議した。

3) 平尾専門家は本月, 次の通りセミナーを実施した。

○“日本における水稻害虫の発生動向と防除の現況”

(於 慶南道振興院)

○“ウンカ類の海外飛来と日本における媒介新ウイルス病の発生” (於 同上)

○“ウンカ類飛来調査の現状と発生予察の問題点”

(於 農技研)

4) 団長は休暇一時帰国中, 9月24日開催された畜産および農業気象災害対策研究に対する各分野別専門家討議会および9月9日開催された事前調査団の帰国報告会に出席した。

4. 任国側の協力体制

変化はない。

5. 機資材の状況

別に異常はない。

業 務 情 況 報 告 書

(8 1 年 1 0 月 分)

韓国農業研究協力

坪 井 八 十 二

I. プロジェクト概況

1. 一 般 概 況

1) 日本専門家

平尾専門家は予定通り10月3日帰国した。また麦研の温冷調節温室の点検のため北原専門家が10月12日に着任、所定の任務を無事完遂して10月29日帰国した。

2) 鄭 鎭 (野菜試) 研修員は10月1日、盧承杓 (北陸農試) 研修員は10月7日にそれぞれ出国した。

3) 供 与 機 材

該当なし。

4) 専門家携行機材

北原専門家が温冷調節温室の修理に要する部品を若干持参した。

5) 資 料

該当なし。

2. 研 究 状 況

1) 研究会、協議会

- 農漁民後継者大会 (1 0 月 7 日)
- 経済作物主産団地総合診断および対策推進協議会 (1 0 月 1 2 日)
- 農業科学シンポジウム (1 0 月 1 7 日)
- 農薬研究所新設に伴う協議会 (1 0 月 3 0 日)

3. 日本専門家の活動状況

1) 団長は'81年水稻冷害の常習的な被害地である中部以北の山間高冷地や東海岸の水稻作況視察のため10月13日～10月15日の間現地へ出張した。

また10月26日～10月28日にかけて南部平野地帯の稲作視察のため出張した。

2) 北原専門家は別紙報告書の通り短期間に所期の任務を達成して予定通り帰国した。

4. 任国側の協力体制

変化はない。

5. 機資材の状況

異常はない

'81年度派遣専門家の携行機材（小松専門家以外）の一括購送が未着の状態である。
（購送については手続中である）

大久保 11/10

<備 考>

韓国政府は本年秋穀買入れ価格を昨年に比べて14%値上げの新品種2等品基準80kg入
1俵5万2千60ウオンに決定し、買入れ物量は6百万石に策定、11月5日から12月
20日までに全量を現金で買入れることにした。

秋穀の年度別生産量および買入れ量、買入れ価格引上推移は下表の通りである。

年 度	生 産 量 (千石)	買 入 れ 量 (千石)	買 入 れ 比 率 (%)	買 入 れ 価 格 (ウオン)	引 上 率 (%)
75	32,424	5,483	16.9	19,500	23.7
76	36,215	7,245	20.0	23,200	19.0
77	41,706	9,742	23.4	26,000	12.1
78	40,258	9,413	23.4	30,000	15.4
79	38,645	9,082	23.4	36,600	22.0
80	24,655	3,790	15.4	45,750	25.0
81	38,000 (推 定)	6,000	15.7	52,160	14.0

業 務 情 況 報 告 書
(8 1 年 1 1 月 分)

韓国農業研究協力

坪 井 八 十 二

I プロジェクト概況

1. 一 般 概 況

1) 日本専門家

本月は団長1人のみである。

2) 韓国研修員

南潤一研修員(畑作研究センター)は11月22日、崔周星研修員は11月30日それぞれ研修を終え帰国した。

3) 供 与 機 材

該当なし。

4) 専門家携行機材

該当なし。

5) 資 材

11月中に受理した資料は次の通りである。

- ① 国際農林業協力情報 '81/8 Vol.4 №5, №6 各1部
- ② 農林水産省広報 '81/8, '81/9 各1部
- ③ 世界の農林水産 '81/9, '81/10 各1部
- ④ 専門家通信 Vol.2, №3 3部
- ⑤ 国際農林業協力情報 '81/10, Vol.4 №7 1部
- ⑥ 農林水産省広報 '81.10月 1部 (以上11月6日)
- ⑦ 国際協力 '81.11月 1部 (11月30日)

2. 研 究 状 況

1) 研究会, 協議会

'81農事試験研究結果発表会 11月27日~28日

3. 日本専門家の活動状況

団長は済州道柑橘協同組合主催の柑橘品評会における特別講演の依頼があつて11月27

日～11月29日に済州道に出張し、“気象学的面から見た済州柑橘の栽培展望”という演題で講演をした。

4. 任国側の協力体制

振興庁の機購が一部改編し、農薬研究所が新設され、試験局の産学協同調整官室、第1、第2、第3調整官室がなくなった。その代り研究調整課が(課長趙正翼)新設された。

また、農業技術研究所には生理遺伝科(科長柳寅秀)、農産物利用科(科長韓判柱)が新設された。

農薬研究所長には湖南作試場長慎氏が任命されその後任には産学協同調整官 聖氏が任命された。また当庁の指導局長には鄭容福氏(前農業公務員教育院長)、技術普及局長には金載正氏(農水省農特事業局長)が発令された。

5. 機資材の状況

'80年供与機材農業気象綜合記録装置(作試珍富出張所)が落雷により部品の損傷を来し、正常稼働が不能状態である。

このことについては11月18日付韓農81-53(件名'80導入試験機器の修理について)にて修理の依頼公文を発信した。

II 一般概況

1. 振興庁の勤務時間が11月1日から09:00～17:00に変更になった。

2. ガソリン1ℓ当り700ウォンが11月29日からℓ当り40ウォンが値上りし、740ウォンになった。

3. 本年の稲作の収穫作業は順調に進み、裏作麦の播種は約40万町歩で昨年に比べて5～6万町歩がのびている。しかし、雨と寒さのため晩播面積がかなり大きいのが心配であると言っている。

本年の秋穀の収量の公式・集計は12月上旬に発表される予定である。

麦類生理生態

増田澄夫

目的 日韓農業協同研究（麦類生理生態）
期間 昭和56年3月25日～4月14日（3週間）
国名、場所 大韓民国水原市
農村振興庁麦類研究所

目的

主な目的は1975年から始められた本共同研究のうち、麦類関係の研究について進展状況を把握し、残された問題点について整理を行うことにあった。そのため、麦類研究所を中心に嶺南作物試験場、湖南作物試験場等において圃場施設等視察を行うとともに試験研究の実施状況を聴取、討議を行い、所見をまとめた。その大要は次のとおりである。

1. 共同研究について

1) 麦類については1975年に本研究が開始されて以来現在まで延10名の専門家が派遣され、「麦類の安全多収品種に関する研究」ならびに「麦類の生理、生態に関する研究」の課題についての共同研究を実施してきた。前者に関しては主として育種技術に関連した研究が進められ、このうちとくに世代促進技術、耐病性検定技術、早熟化にかかわる播種、日長感応性検定技術はすでに実際化され、麦類研究所だけでなく、嶺南、湖南作試でも、実施されあるいは実施されようとしている。また、最近問題となっている大麦の品質についても検定法等が検討され、結果が積極的に利用されようとしている。

後者に関しては、麦類の干ばつ、あるいは低温障害に関する研究が行われ、寒害、干害等生育期の多い韓国の麦作にとって有用の知見が提供された。しかし光合成測定法等については折角研究が行われながら麦類研究所に測定器がないため、有効に活用されているとはいえない。栽培技術一般については韓国でも急速に機械化が進みつつあり、専門家のセミナー、情報提供等によりドリル播、全面全層播など機械を利用した省力多収技術が積極的に検討され、一部で実際栽培されつつある。

2) 麦類に関する一般的な情報については本研究の開始当初、専門家によって持参された多量の別刷等が「麦類文献集」として7冊に分類製本され、基本文献としてよく利活用されている。さらにその後派遣された専門家あるいは滞日した研修員によって最新の文献や会議内容が紹介され、日本における麦類の試験研究に関する情報はごく最近のものまで把握

されているといつてよい。

- 3) 以上のように本研究は1～2補完を要する点はあるとしても全般的には順調に進展し、十分目的を果してきたものと考えられる。したがって、今後はむしろ定型的な共同研究より、適宜問題になっている点について弾力的な交流をはかる方が効果的と判断される。
- 4) なお、本研究の成果をより効果あらしめるためには、次のような点について、今後も配慮する必要がある。
 - Ⅰ) 光合成測定装置等、課題関連機器の導入
 - Ⅱ) 当初導入の行われた機器の磨耗、破損部品の更新
 - Ⅲ) その他韓国で未生産の消耗品の提供

2 残された問題点及び研究課題

この点に関しては8月31日に農村振興庁において開催された「麦類大型試験研究発表会」において麦類研究所、嶺南、湖南作試、機械研等よりそれぞれ研究上の問題点及び推進計画が発表された。(内容は後日印刷配布予定)、それをみる限り問題となる点は殆ど網羅してあげられ、そのうち、かなりのものが推進計画に盛り込まれている。今後その計画が適切に実施されれば、問題は序々に解決されるものと考えられるが、そのうち特に重要と思われる点についてふれば次のとおりである。

1) 安定、多収、早熟品種の育成

水田裏作が主体である韓国では早生化に対する要求が極めて強く、このため育種目標も早生化が最重点にあげられている。しかし、日本の東北地方以上に冬の寒さが厳しい韓国では、その場合も耐寒性の付与が絶対の条件になるが、両形質は相矛盾する。最近育成された早生品種はかなりよく両者を調和させているが、未だ不安定な面が多い。当面は早生化の要望が強いにしても、今後このような環境条件のもとで麦作を十分定着させていくには、むしろ安定多収にウエイトをおいた方向をとる方が望ましいと考えられる。

2) 大麦及び小麦の品質改善

大麦にせよ小麦にせよ需要を増進させるには、品質の改善をはかる必要のあることはいうまでもない。品質の改善点は多々あるが、とくにあげられるのは、韓国では、冬の厳しい低温の割合に春以降急速に気温が上昇するため登熟期間が短くなり、充実が不良になりがちな点である。このため、登熟効率のよい麦を選抜していく必要があり、そのため、月化、転流等の機構解明も行っておく必要がある。このことは多収化のためにも必要なことはいうまでもない。

3) 省力機械化栽培の確立

栽培に関しては機械化が急速に進んでいるが当面は播種作業に限られている。しかし、

収穫、乾燥等の機械化も早晚日程にのぼると考えられ、早急に検討しておく必要がある。とくに水田裏作の比率の高まっている現在、稲に使用する機械の有効利用を主に検討していく必要がある。

3 その他

1) 韓国の麦作概況及び今後の方向

1980年度の麦作面積は約50haで1970年当時の約85万haに比べかなり減少している。とくに米の自給が達成された1977年からの減少が大きい。これは直接には大麦の需要減、間接的には急速な経済成長による農村社会条件の変化が大きくあざかっている。しかし、1980年には冷害により米の自給が不可能となり、再び大麦の増産が奨励され、当面大麦を加えて自給を達成する方針がとられている。この方針は今後しばらくの間続けられるとみられる。これは米については多収ではあるが耐冷性に難点がある Japonica-Indica type の品種の作付比率を低め、相対的に多収ではあるが耐冷性に優れる Japonica type の品種の作付比率を高め、このために生ずる生産量の減を大麦で補っていかうという考え方が強く打出されているからである。しかし現実には1977年を機に、それまで30%程度の大麦を米に混入することが義務づけられたのを緩和したため、混入率が急速に低下し、麦ばなれが生じだしている。そこで、これを防ぎ、再び、需要を高める方策が検討され、当面の対策として、従来の丸麦から調整しやすく、嗜好性も高い割麦にかえる試み等が始められている。このように、当面は大麦の積極的な利用が最も大きな問題となっている。

しかし、長期的にみれば米の生産も再び増加し、一方消費は漸減することも予想され、食用として利用される大麦の量は減少するものと考えられる。日本では、1960年代に入り、食用の需要は急激に減少したが、飼料用、ビール用等が増加し総需要ではむしろ60年代より増加している。国状が異なるので日本同様の経過をとるとはいいがたいが、需要構造の変化は想定しておく必要がある。

小麦については、熟期が晩く、大麦以上に裏作導入がむずかしく、減少の一途をたどり、自給率も3%程度にしかなくなっていないが、長期的にみた場合には必要性は増加するものと思われる。したがって、早熟化、多収化及び良質化を主にたゆまず、育成、研究をすすめておく必要があるように思われる。

※丸麦 　ただ搗精しただけの麦で前夜から水に浸しておき、吸水させてから米と混ぜて炊く。

※割麦 　中央の縦溝から2つに割って搗精、吸水速度が早く米と同時に混ぜて炊ける。割麦技術を日本から導入希望。

<付> 行動日程及び内容

月 日	曜	行 動 内 容	
3月25日	水	成田発 水原着	
	木	麦類研究所において日程打合せ 同所大麦育種科圃場観察	
	金	大麦育種科圃場観察 研究実施状況聴取討議	
	土	同 上	
	日	資 料 整 理	
	月	麦類大型試験研究発表会参席	
	火	嶺南作物試験場視察 圃場観察及び研究討議 セミナー「日本における麦作 び麦試験研究の動向」実施	
4月 1日	水	慶尚南道振興院 麦関係試験視察 川試験場(民間) ビール麦育種試験視察	
	2	木	作物試験場木浦支所麦関係試験視察
	3	金	湖南作物試験場視察 圃場観察及び研究討議 セミナー「日本における麦作及び麦試験研究の動向」実施
	4	土	裡里市周辺農家圃場観察
	5	日	資 料 整 理
	6	月	麦類研究所 麦品質科研究実施状況聴取討議
	7	火	同 小麦育種科圃場観察研究実施状況聴取討議
	8	水	同 上
	9	木	同 麦栽培科圃場観察 研究実施状況聴取討議 セミナー「日本における麦作および麦試験研究の現状と問題点」実施
	10	金	同 麦栽培科研究討議 麦試験研究に関する総合討論
	11	土	問題点等整理
	12	日	資 料 整 理
	13	月	麦類研究懇談会(報告会)
	14	火	水原発 成田着